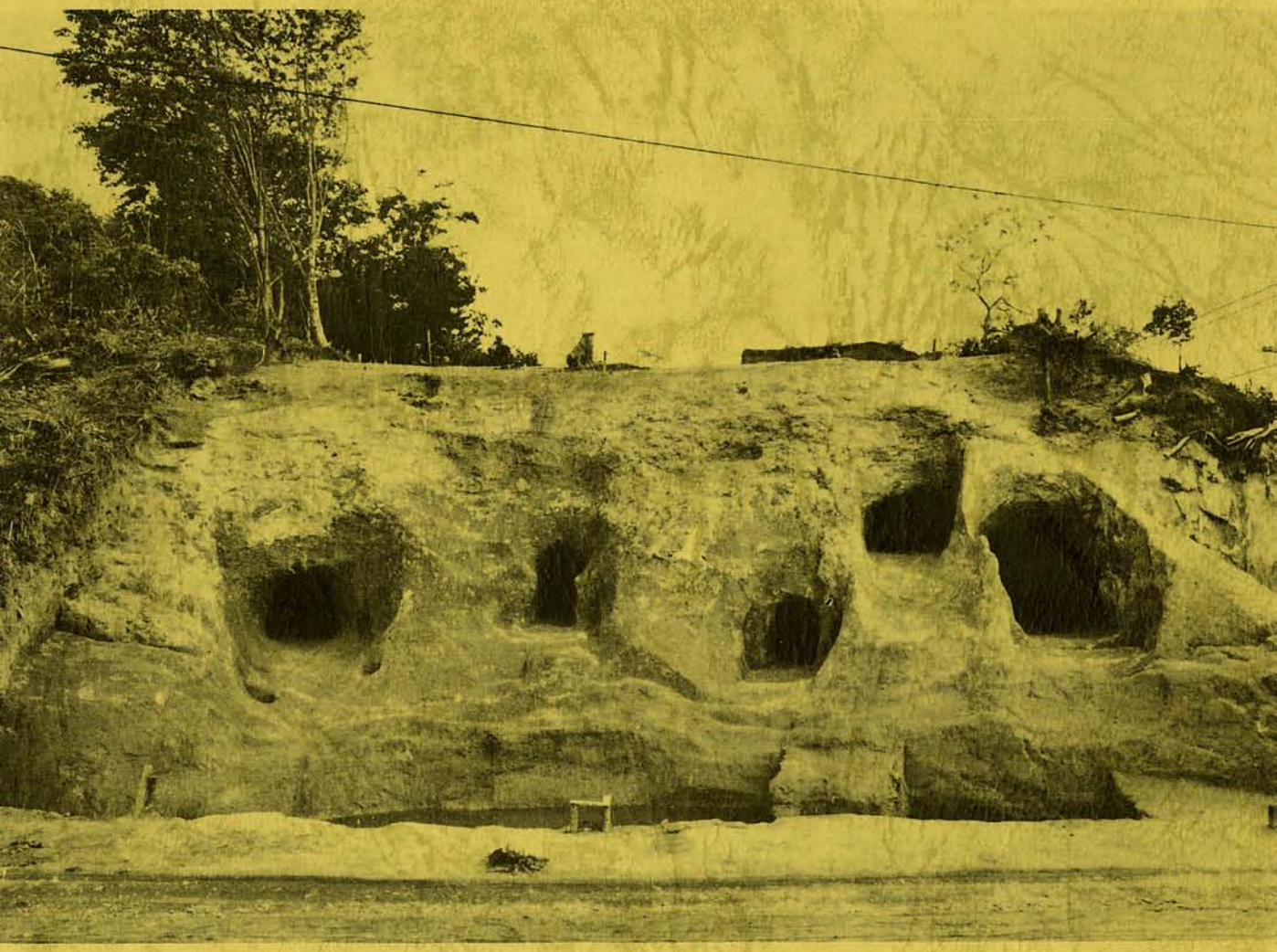
多賀城市文化財調査報告書第７集

大代横穴古墳群

—発掘調査報告書—



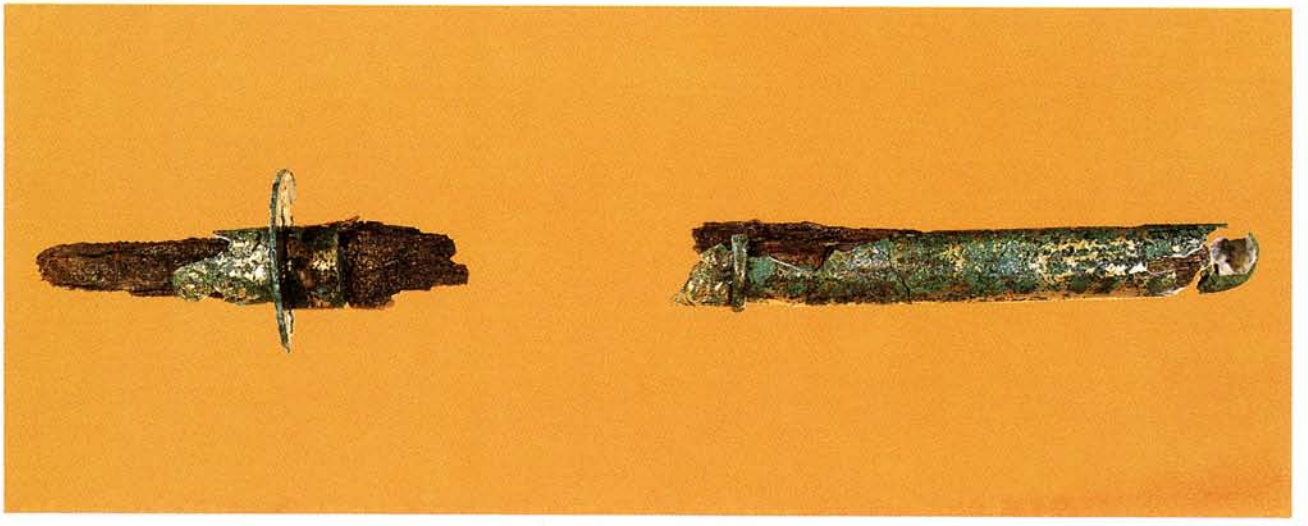
昭和60年3月

多賀城市教育委員会

大代横穴古墳群

—発掘調査報告書—

金銅装頭椎大刀（6号横穴出土）



同　　上

序

埋蔵文化財の緊急調査は、民間による宅地開発や公共事業等の原因により、その数を増して来ている。

大代横穴古墳群は、本市の埋蔵文化財の中で唯一の横穴古墳であるが、このほど、宮城県仙台東土木事務所が施工する都市計画街路工事により、丘陵の一部が削られるため発掘調査を実施したものである。

調査の結果、新たに横穴古墳８基、塚１基が発見され、横穴古墳から勾玉、切子玉、耳環、金銅装頭椎大刀などの貴重な副葬品が出土した。特に、頭椎大刀は県内で３例目の出土であり全国的な出土分布の最北端に位置するもので、学問的にも貴重な資料になるものと思われる。

さらに、本横穴古墳群が大代地区のみならず、陸奥国府多賀城が築造される奈良時代以前の本市の歴史を解明する上で、大変重要な遺跡になるものと考えられる。

本報告書が、学術研究のみならず、学校教育や社会教育の場でも大いに活用されれば幸いである。

発掘調査や遺物の保存につきましては、宮城県仙台東土木事務所、東北歴史資料館をはじめ地元の方々などのご協力をいただき、心から感謝申し上げる次第である。

昭和 60 年 3 月

多賀城市教育委員会

教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1．本書は、都市計画街路（大代・七ケ浜線）工事のための事前調査として実施した「大代横穴古墳群」の発掘調査成果をとりまとめたものである。

2．本調査は、多賀城市教育委員会が、宮城県仙台東土木事務所から調査委託を受けて行なったものである。

3．本書の作製についての作業分担は次のとおりである。

本文執筆　　高倉敏明 …… Ⅱ、Ⅳ1（6号横穴）、Ⅴ、Ⅵ
　　滝口　卓 …… Ⅳ1（3号、4号横穴）、Ⅳ2
　　石川俊英 …… Ⅳ1（1号横穴）
　　石本　敬 …… Ⅳ1（2号・10～14号・21号・22号横穴）
　　千葉孝弥 …… Ⅰ、Ⅳ1（5号横穴、塚）
　　相沢清利 …… Ⅲ、Ⅳ1（6～9号横穴）、Ⅳ3

遺構・遺物トレース …… 石本　敬、千葉孝弥、相沢清利

遺物実測 …… 石本　敬、千葉孝弥、相沢清利、滝口裕子

遺物写真 …… 高倉敏明、石本　敬

遺構写真 …… 石川俊英、千葉孝弥、相沢清利

図面整理 …… 石本　敬

遺物整理 …… 滝口裕子、我妻悦子、芳賀英実

編　　集 …… 高倉敏明、石本　敬

4．調査で出土した鉄製品の処理については、東北歴史資料館に依頼し、村山斌夫氏よりご教示、ご協力を受けた。

調　査　体　制

1．遺跡所在地　：　多賀城市大代五丁目81－1

2．調 査 期 間　：　昭和59年3月21日～6月4日

3．調査主体者　：　多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　誼

4．調査担当者　：　多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係

社会教育課長　柳原　邦男

文化財保護係長　菊池　光信

主　　査　高倉　敏明

技　　師　滝口　　卓

石川　俊英

石本　　敬

嘱　　託　千葉　孝弥

相沢　清利

5．調査協力者　：　宮城県仙台東土木事務所、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所、多賀城市建設課、鎌田俊昭（多賀城市文化財保護委員）、遠藤照代（地権者）、福岡新五郎、跡部三夫

6．調査参加者　：　跡部幸治、伊藤藤吉、小泉三之助、佐々木四郎、佐藤東三、佐藤三夫、星忠次郎、赤間かつ子、阿部美津子、猪俣敏子、小野玉乃、大友道子、後藤恵子、鶴巻まき子、早坂ゑみ子、佐藤たま子、鈴木劭、佐藤さき子

目　　次

Ⅰ．大代横穴古墳群の位置と環境 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯 …… 4
Ⅲ．調査方法と経過 …… 4
Ⅳ．調査成果 …… 6
1．発見遺構と出土遺物 …… 6
1号横穴 …… 6
2号横穴 …… 10
3号横穴 …… 13
4号横穴 …… 14
5号横穴 …… 16
6号横穴 …… 16
7号横穴 …… 20
8号横穴 …… 21
9号横穴 …… 21
10号横穴 …… 22
11号横穴 …… 22
12号横穴 …… 22
13号横穴 …… 23
14号横穴 …… 23
21号横穴 …… 23
22号横穴 …… 24
塚 …… 26
2．遺構外出土遺物 …… 27
3．火山灰層下の調査 …… 29
Ⅴ　考　　察 …… 30
1．横穴の構造と編年 …… 30
2．横穴群の年代と性格 …… 32
(1)　金銅装大刀について …… 32
(2)　横穴群の年代と性格 …… 34
Ⅵ　ま と め …… 36

Ⅰ　大代横穴古墳群の位置と環境

大代横穴古墳群は、多賀城市の中心部から東へ約３km離れた大代５丁目地内に所在している。即ち、県道多賀城菖蒲田線と七ケ浜町遠山方面に至る道路との分岐点から、西へ少し離れた丘陵斜面に造営されている。ここは地理的に見ると、松島湾を抱え込む半島の基部にあたり、北へ２km、南へ1.５kmで海岸線に達する。地形的に見ると、本横穴古墳群の立地している丘陵は、陸前丘陵の中の松島丘陵に属している。これは富山、姉取山、大高森などを除くと40～100ｍ前後の小起伏丘陵であり、南の海岸線に向けて枝状に発達している。これらは新第三紀に形成された砂岩及び凝灰質砂岩などで形成されている。なお、この丘陵の西、南面には泥、砂、礫などが厚く堆積する沖積地とその背後には後背湿地が見られ、更に海岸線に近い所では砂丘、浜堤が発達している。この砂丘、浜堤は安定した地盤であるとされ、平野に発達している部落の分布の原形は、この砂、礫層の分布に支配されていると言われている。背後に小丘陵を控え、沖積地と浜堤を有して海岸線に面した当地域は、良好な生活環境のもとにあったと言えよう。

このような良好な生活条件に恵まれたこの地域には、各時代の遺構が多く残されており、特に貝塚には見るべきものがある。まず、縄文時代のものとしては、国指定史跡である大木囲貝塚（七ケ浜町）をはじめ橋本囲貝塚（多賀城市）、左道貝塚、鬼ノ神山貝塚（七ケ浜町）などが台地縁辺に立地している。弥生時代のものでは、桝形囲貝塚、大代洞窟遺跡などが知られている。特に桝形囲貝塚は大正８年に調査が行なわれた際、籾痕のある土器が出土し、東北地方でも石器時代から稲作農耕が営まれていたことを立証した遺跡として全国的に著名である。しかし、残念なことに現在その所在を確かめることができなくなっている。本横穴古墳群とほぼ同時代と思われる古墳時代の後期から奈良時代にかけての遺跡としては、桝形、砂山、薬師堂などの横穴古墳群がある。これらの横穴古墳群は本遺跡とは距離的に近く、また、それぞれも隣接しているところから、一つの大きなまとまりとして把えることも可能であろう。これらの被葬者の日常生活の場であった集落はまだ知られていない。奈良・平安時代の遺跡としては、北東約4.５kmのところに陸奥国府であった多賀城跡があり、周辺には東原、西原、元舟場、新田前などの集落跡がある。新田前遺跡については昭和49年に調査が行なわれ、大溝や曲物を据えた井戸などが発見されており、当時の生活の一端をのぞかせている。他の遺跡については、すでに煙滅したり、所在が不明となっている。

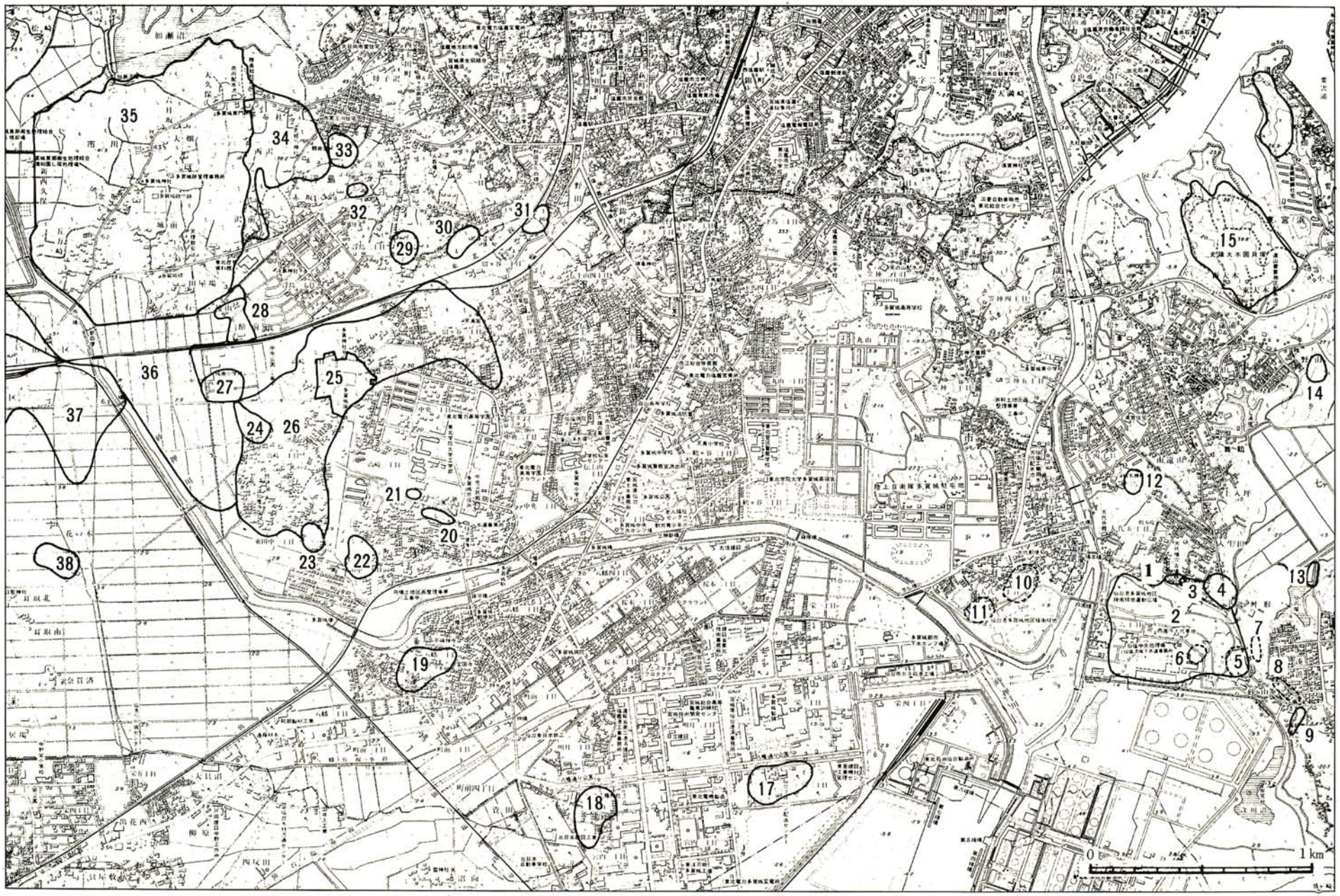
さて、本横穴古墳に関しては、昭和13年刊行の「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書12」所収の『宮城県内の古墳及び横穴』の中に記載があり、「今猶発堀されざる古墳」として、そ

の名が挙げられている。詳しい記載はないが、この頃その存在が知られていたということは、すでに開口していた横穴古墳もあったと思われる。

このように、早くからその存在が知られていた本横穴古墳群は、これまで正式な調査が行なわれておらず、丘陵南斜面は削平を受けて、崖面に露出した姿を晒しながら今日に至ったのである。砂山、桝形の両横穴古墳群は調査が行なわれはしたものの工事によって壊滅し、薬師堂横穴古墳群は後世の破壊が著しく、原形をとどめていないことを考えると、本横穴古墳群は当地域における横穴古墳の稀少な例として貴重である。

表1　遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	大代横穴古墳群	多賀城市大代５丁目	丘陵端	横穴古墳	古墳（後）
2	大代遺跡	多賀城市大代5丁目・６丁目	砂堆	包含地	縄文・平安
3	大代洞窟遺跡	多賀城市大代５丁目	海触崖	洞窟遺跡	弥生
4	橋本囲貝塚	〃	沖積地	貝塚	縄文
5	桝形囲貝塚	多賀城市大代６丁目	〃	〃	弥生
6	新田前遺跡	七ケ浜町新田前	砂堆	集落跡	奈良・平安
7	桝形横穴古墳群	七ケ浜町湊浜	丘陵端	横穴古墳	古墳（後）
8	砂山横穴古墳群	〃	〃	〃	〃
9	薬師横穴古墳群	〃	〃	〃	〃
10	元舟場遺跡	多賀城市大代１丁目	自然堤防	散布地	平安
11	西原遺跡	〃	〃	〃	奈良・平安
12	柏木遺跡	多賀城市大代５丁目	丘陵斜面	〃	〃
13	林崎貝塚	七ケ浜町松ケ浜	海岸低地	貝塚	縄文（晩）
14	野山遺跡	七ケ浜町菖蒲田浜	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生
15	国史跡大木囲貝塚	七ケ浜町東宮浜	丘陵	貝塚	縄文（前・中・後）
16	左道貝塚	〃	丘陵端	〃	縄文（前）
17	東原遺跡	多賀城市栄３丁目	砂堆	散布地	奈良・平安
18	八幡沖遺跡	多賀城市宮内１丁目	平地	〃	〃
19	八幡館跡	多賀城市八幡２丁目	丘陵	散布地・館跡	奈良・平安・中世
20	桜井館跡	多賀城市中央１丁目	〃	館跡	中世
21	稲荷殿古墳	多賀城市高崎３丁目	〃	高塚古墳（円）	古墳（後）
22	志引遺跡	多賀城市東田中２丁目	〃	包含地・館跡	旧石器・奈良・平安・中世
23	東田中窪前遺跡	多賀城市東田中１丁目	丘陵麓	散布地・館跡	奈良・平安・中世
24	丸山囲古墳群	多賀城市高崎２丁目	〃	高塚古墳（円）	古墳
25	特別史跡多賀城廃寺跡	多賀城市高崎1丁目・2丁目	丘陵	寺院跡	奈良・平安
26	高崎遺跡	多賀城市高崎・留ケ谷	〃	寺院跡・集落跡・館跡	奈良・平安・中世
27	高平遺跡	多賀城市浮島・高崎１丁目	沖積平野	集落跡	奈良・平安
28	館前遺跡	多賀城市浮島	分離丘陵	官衛・館跡	平安・中世
29	小沢原遺跡	多賀城市浮島２丁目	丘陵	散布地	奈良・平安
30	野田遺跡	多賀城市留ケ谷２丁目	〃	散布地・館跡	奈良・平安・中世
31	矢作ケ館跡	〃	〃	〃	〃
32	高原遺跡	多賀城市浮島	〃	散布地	奈良・平安
33	法性院遺跡	〃	〃	〃	〃
34	西沢遺跡	多賀城市市川・浮島	〃	〃	〃
35	特別史跡多賀城跡	〃	〃	国府跡	奈良・平安・中世
36	市川橋遺跡	多賀城市市川・浮島・高崎	沖積平野	集落跡	奈良・平安
37	山王遺跡	多賀城市山王・南宮	自然堤防	〃	古墳・奈良・平安
38	大日北遺跡	多賀城市高橋	〃	散布地	奈良・平安


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
1 km

第1図　遺跡分布図

Ⅱ　調査に至る経緯

今回の発掘調査の原因となった都市計画街路大代七ケ浜線は、多賀城市大代１丁目を起点とし、七ケ浜町湊浜字桝形を終点とする延長1,180m、幅員12～15mの街路である。本街路は昭和54年12月に都市計画決定されたものである。

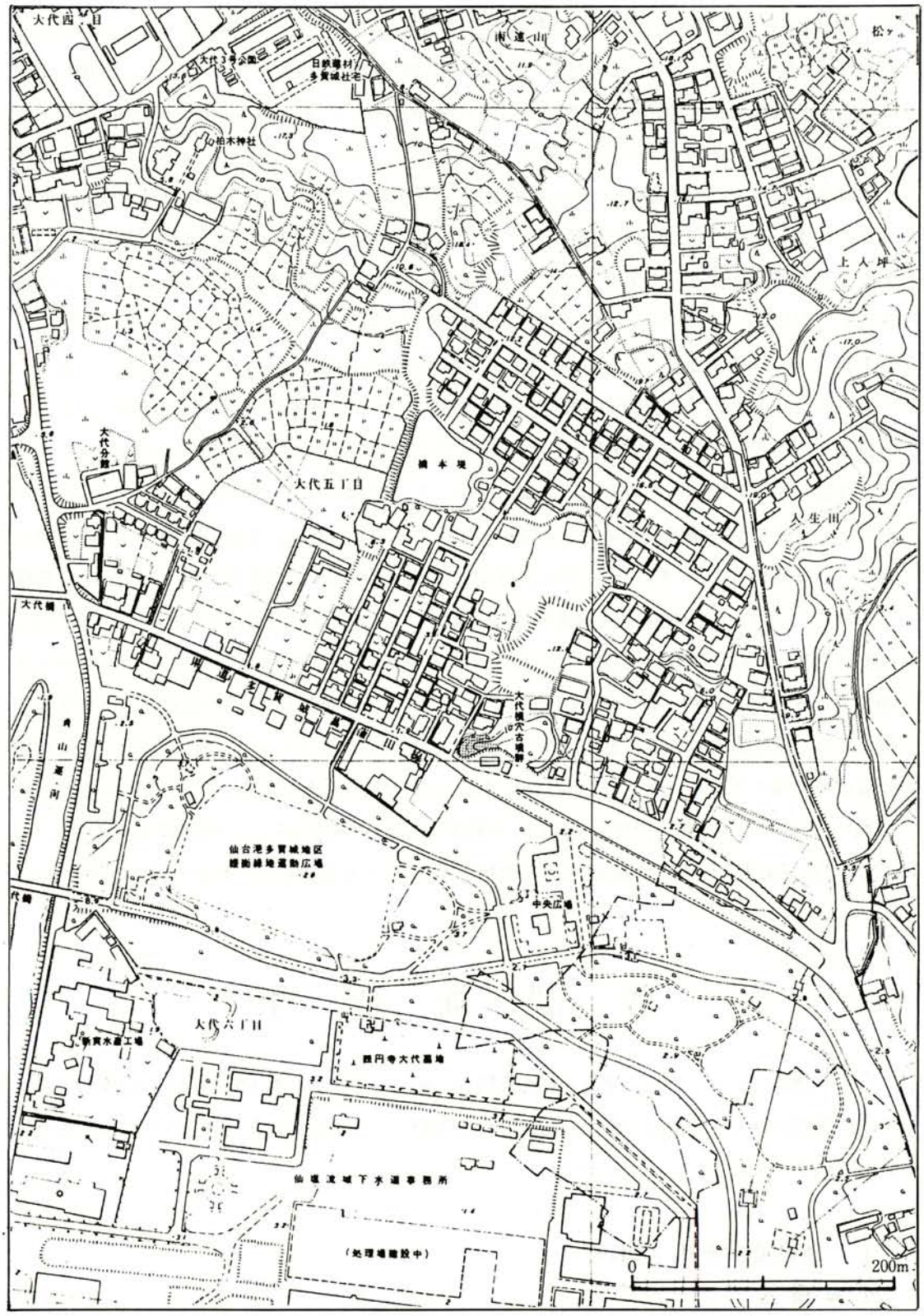
調査についての協議は、昭和57年に遡る。宮城県仙台東土木事務所から示された本街路の工事計画によれば、本市唯一の横穴古墳群が所在する丘陵の南端部分が削平を受けるため、現地踏査を行なった。その結果、県道に突出した丘陵南崖面に数基の横穴古墳の痕跡が確認され、さらに、西側斜面は比較的原地形が保たれていると思慮されたことから、新たに横穴古墳が発見される可能性が考えられたため、事前調査として昭和58年度に調査を実施することにした。

本街路工事の施行者である宮城県仙台東土木事務所と昭和58年７月に打ち合わせを行ない、10月に埋蔵文化財発掘通知が提出された。その後、昭和59年に入って、調査に係る打ち合わせを行ない、同年２月14日付けで土木事務所長と多賀城市長との間で契約が行なわれた。３月14日に現地立ち合い後、21日から調査に踏み切ったものである。

Ⅲ　調査方法と経過

発掘調査は、都市計画街路の路線敷にかかる丘陵の先端部、約300㎡を対象として行なった。本横穴古墳群は、丘陵南崖面にすでに30基程が開口しており、今回対象となった調査地域は、その西端に位置する。調査区の現状は、雑木におおわれており、道路に面した所はゴミ捨場となっていた。このような現状から、当地区においては今まで横穴古墳の存在は確認されていなかったが、多賀城市から七ケ浜町にかけて、横穴古墳が連綿と続いていることより、西斜面にも造営されている可能性が強いことが予想された。そこで、今回の調査は、西斜面へ延びる横穴古墳の検出を主目的に実施した。調査基準点は国家座標を使用し、原点１（X：－189,992.255、Y：＋18,417.184）と原点２（X：－189,988.757、Y：＋18,411.411）を結ぶ線を基準線とした。さらに、原点１を基準点として、調査区全域に３m方限のグリットを設定した。グリット名は南北方向をアルファベット（北側からA、B、C、…）、東西方向をアラビア数字（東側から01、02、03、…）で表わした。

調査は昭和59年３月21日より開始した。まず、調査区内の雑木の伐採及び下草刈りを行ない、


大代西一丁目
大代3号公園
日鉄鋼材
多賀城社宅
南道山
松ヶ
柏木神社
上人坪
大代分館
大代五丁目
橋本堤
人生山
大代橋
大代横穴古墳群
青山運河
仙台港多賀城地区
緑地緑地運動広場
中央広場
大代六丁目
飼育水産工場
既円寺大代墓地
仙塩流域下水道事務所
(処理場建設中)
0
200m

第2図　調査区位置図

その後、全体の表土剝ぎを行なう。遺構検出作業は、丘陵頂部付近から開始する（３月28日）。その結果、周溝を伴なうマウンド状の高まりを呈した積土部分を検出した。そして、この積土部分を含めた丘陵頂部付近の地形図を作成する。西側傾斜面では、表土除去の後、黒褐色土の旧表土が斜面の窪まった箇所に10～30cmの厚さで認められた。さらに、旧表土を除去したところ未開口の横穴古墳を６ケ所で確認し、北から順に1～6号横穴とした（４月４日）。堆積土は基本的に半載して掘り込み、縦断面と横断面のセクション図を作成した。各横穴には閉塞石が認められ、特に１～３号横穴は玄室の天井も崩落せずに残り、閉塞石も原位置をほぼとどめていた。各横穴とも、堆積土のセクション図及び閉塞石実測図作成の後、玄室内の調査を開始する（４月７日）。６号横穴から鉄刀が多量に出土し、その出土状況の図面を作成して、写真撮影を行なう。また、６号横穴の南側において、２基の横穴を新たに発見し、７、８号横穴とした（４月13日）。１～６号横穴については、玄室内の調査をほぼ終了し、平面図、断面図作成を開始する（４月17日）。丘陵南崖面にすでに開口している横穴古墳についても、現在まで調査が行なわれていないため、今回その一部の横穴古墳の調査を行ない図面を作成することにした。それらの横穴は、西側から順に９～36号横穴とし、そのうち、10～14号横穴、21、22号横穴の調査を行なう（４月26日）。各横穴の調査に並行して、調査区内の地形測量を開始する（４月27日）。横穴の調査をすべて終了し、図面の補足、全景写真撮影を行なう（５月７日）。基準点の国家座標を求めるために、トラバース測量に入る（５月16日）。また、丘陵頂部においては、火山灰（黄色ローム）の堆積状況及びその下層における遺構の有無の確認を目的として、２ｍ×３ｍのトレンチを２ケ所に設定し、凝灰岩基盤層までの掘り下げを行なう（５月22日）。並行して、マウンド状の高まりを呈した積土部分の断ち割りを行ない、その積土の状況を検討した結果、時期は不明ながら、この遺構を塚と判断した。さらに、丘陵南側全体の地形測量、遠景写真撮影を行ない、６月４日にすべての調査を終了した。

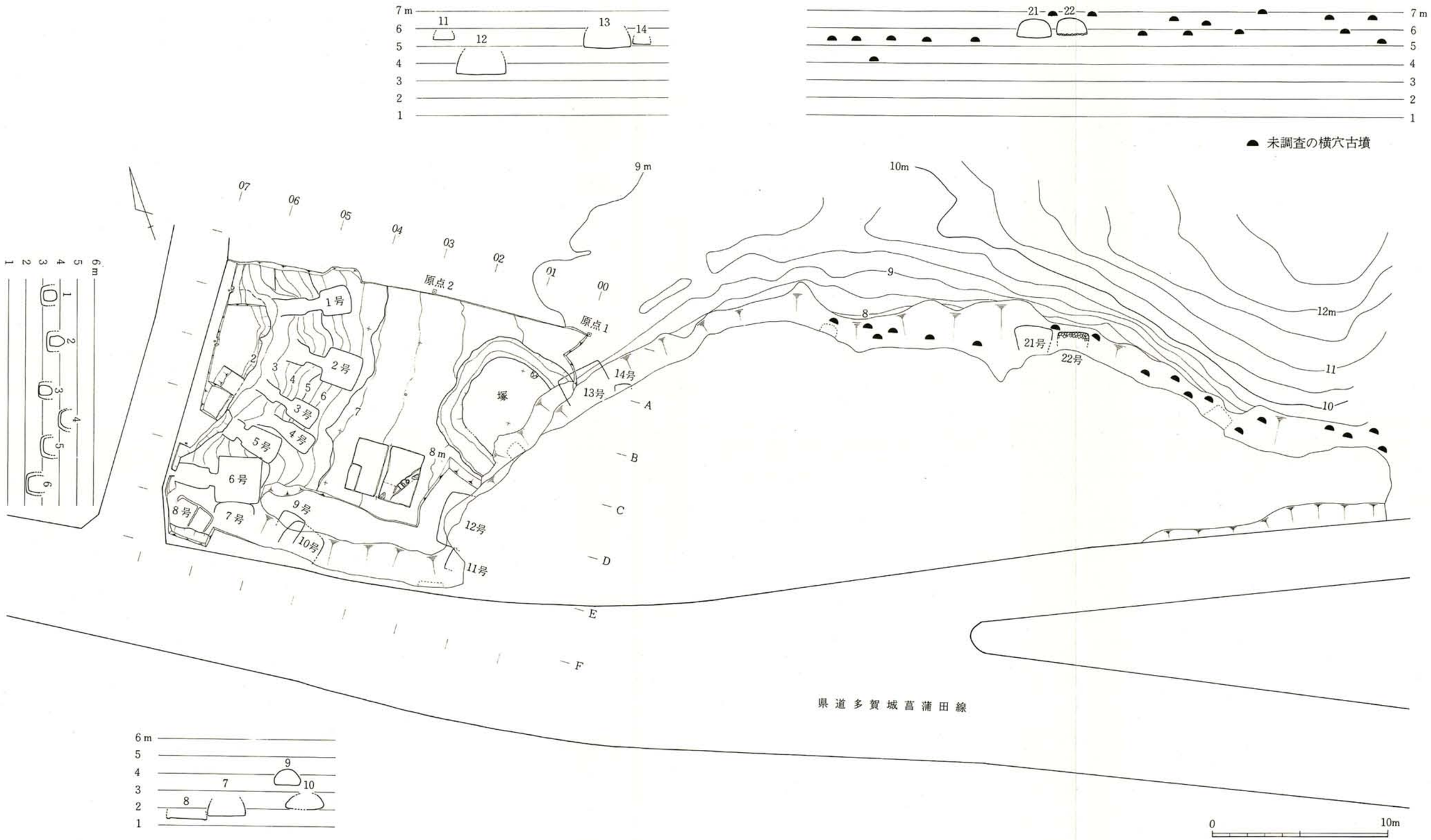
Ⅳ　調　査　成　果

今回の調査によって新たに発見された遺構は、横穴古墳８基、塚１基である。丘陵南崖面にすでに確認されていた27基の横穴古墳のうち、８基についても調査を行なったので、併せて記述することにする。

１．発見遺構と出土遺物

１号横穴

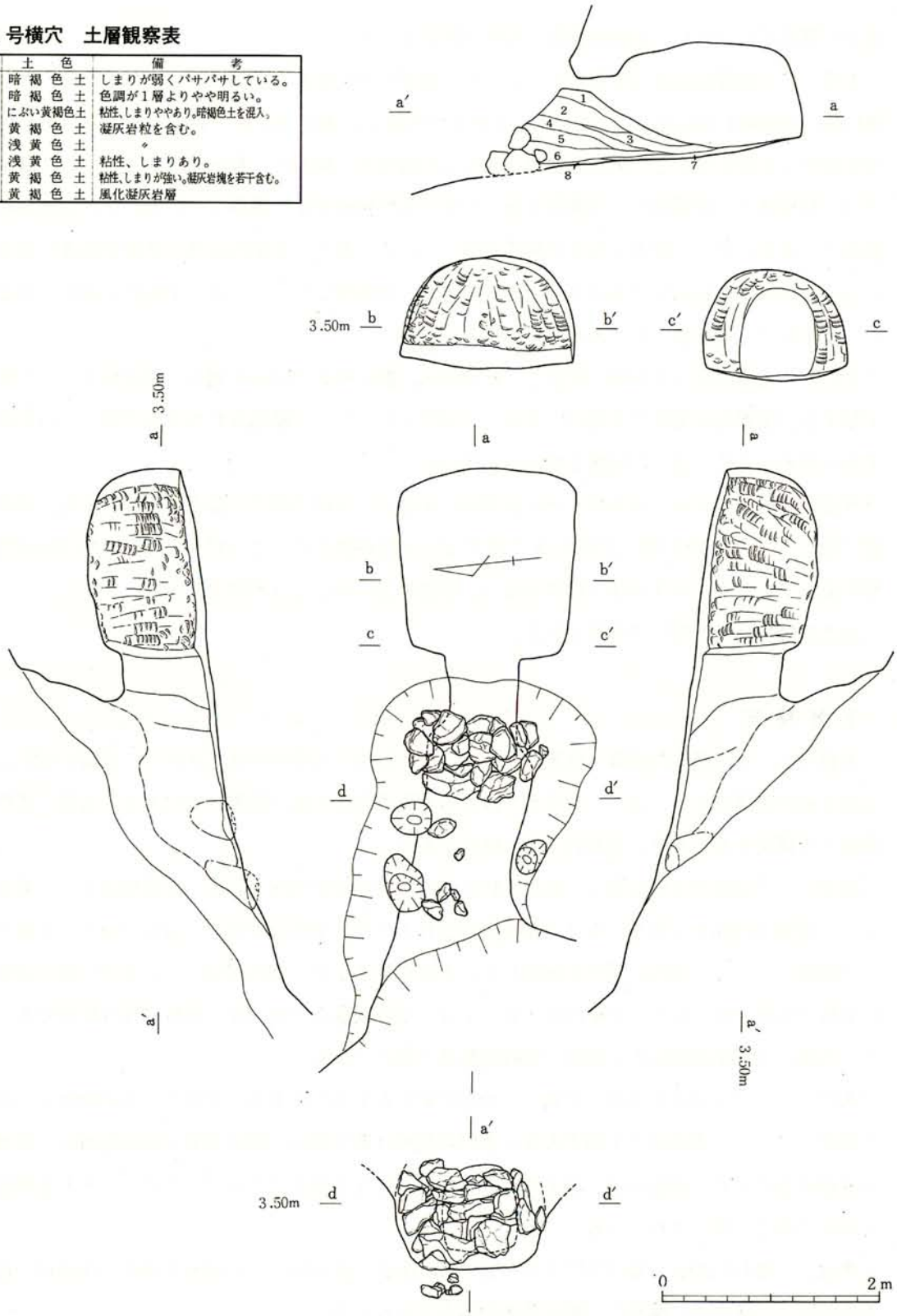
本横穴は、丘陵西斜面で検出された横穴古墳の中で、一番北側に位置する。玄室、玄門、羨


未調査の横穴古墳
原点1
原点2
塚
1号
2号
3号
4号
5号
6号
7号
8号
9号
10号
11号
12号
13号
14号
21号
22号
県道多賀城菖蒲田線
0
10m

第3図　遺構配置図

1号横穴　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	暗褐色土	しまりが弱くパサパサしている。
2	暗褐色土	色調が1層よりやや明るい。
3	にぶい黄褐色土	粘性、しまりややあり。暗褐色土を混入。
4	黄褐色土	凝灰岩粒を含む。
5	浅黄色土	〃
6	浅黄色土	粘性、しまりあり。
7	黄褐色土	粘性、しまりが強い。凝灰岩塊を若干含む。
8	黄褐色土	風化凝灰岩層



第4図　1号横穴実測図

道から構成されており、比較的良好な保存状態であった。

〔玄室〕　平面形はほぼ方形を呈し、コーナー部がやや丸味を帯びている。奥行1.7m、奥壁幅1.6m、前端幅1.34mを測る。床面から天井までの高さは、最も高い所で1.04mである。立面形は変形ドーム形を呈する。床面は玄門に向かって緩やかに傾斜し、若干凹凸が見られる。堆積土は、暗褐色土、黄褐色土、浅黄色土からなり、玄門付近で厚く堆積している。これらは自然流入土と考えられ、下層のものほど粘性が増している。また、玄室内には工具痕が顕著に見られる。工具痕は幅10cm程の単位で、天井から奥壁、両側壁にかけて、ほぼ全面的に認められるが、仕上げはかなり粗い方である。

〔玄門〕　玄室のほぼ中央部に位置し、奥行66cm、幅は中央で62cmを測る。立面形はドーム形を呈する。閉塞石は凝灰岩の切石であり、下部ほどしっかりと積石されたままで残っていたが、上部は閉塞石がやや浮いた状態で検出されている。

〔羨道〕　奥行1.8m、中央幅0.9mを測る。床面は、平坦で前方に緩やかに傾斜する。両側壁に接して左側に2ケ所、右側に1ケ所でピットを検出した。このピットの平面形はほぼ円形を呈しているが、大きさは一様ではない。性格などについては不明である。

〔出土遺物〕　出土遺物は皆無である。

2号横穴

本横穴は、1号横穴の南隣に位置し、斜面のやや奥まった箇所で検出された。両隣の横穴とは約2mの間隔があり、また、わずかではあるが両横穴より高い位置に開口する。玄室、玄門、羨道から構成されており、全長約4mの横穴である。

〔玄室〕　平面形は方形を呈し、奥行2.10m、幅は中央で2.02mを測る。立面形はドーム形を呈し、各壁の四隅から天井にかけて線刻が施されている。床面は平坦で、前方に向かって緩やかに傾斜している。玄門の天井が崩落しているため、そこから土砂が流入し、玄門付近では厚い土層の堆積が見られた。玄室内部においては、壁の剝落などが少なく良好な保存状態であった。各壁には、幅約10cmの工具痕が比較的整然と認められる。

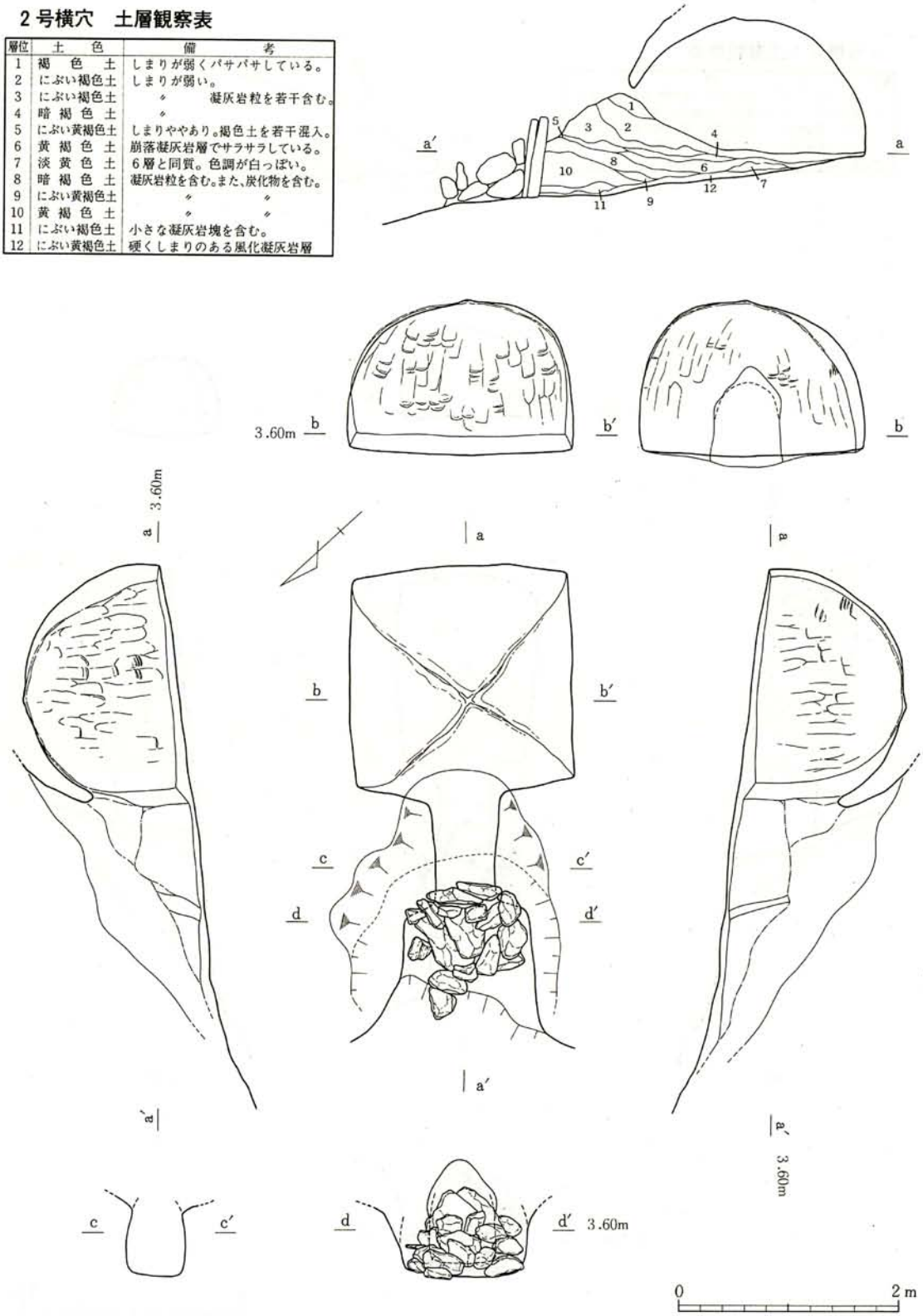
〔玄門〕　玄室のほぼ中央部に位置し、前端で幅がわずかに狭まる。天井及び両側壁の上半部は崩落しており、立面形は不明である。玄門の規模は奥行94cm、幅は中央で54cmを測る。閉塞石は凝灰岩の切石と河原石で、加工された2枚の扁平な大石を立てかけ、さらに、それを補強する形で前方に積石されている。

〔羨道〕　奥行1.20m、幅は玄門より左右に約30cm広く張り出し、1.16mを測る。床面は、前方に向かって緩やかに傾斜し、幅は若干の広がりをみせる。

〔出土遺物〕　出土遺物は皆無である。

2号横穴　土層観察表

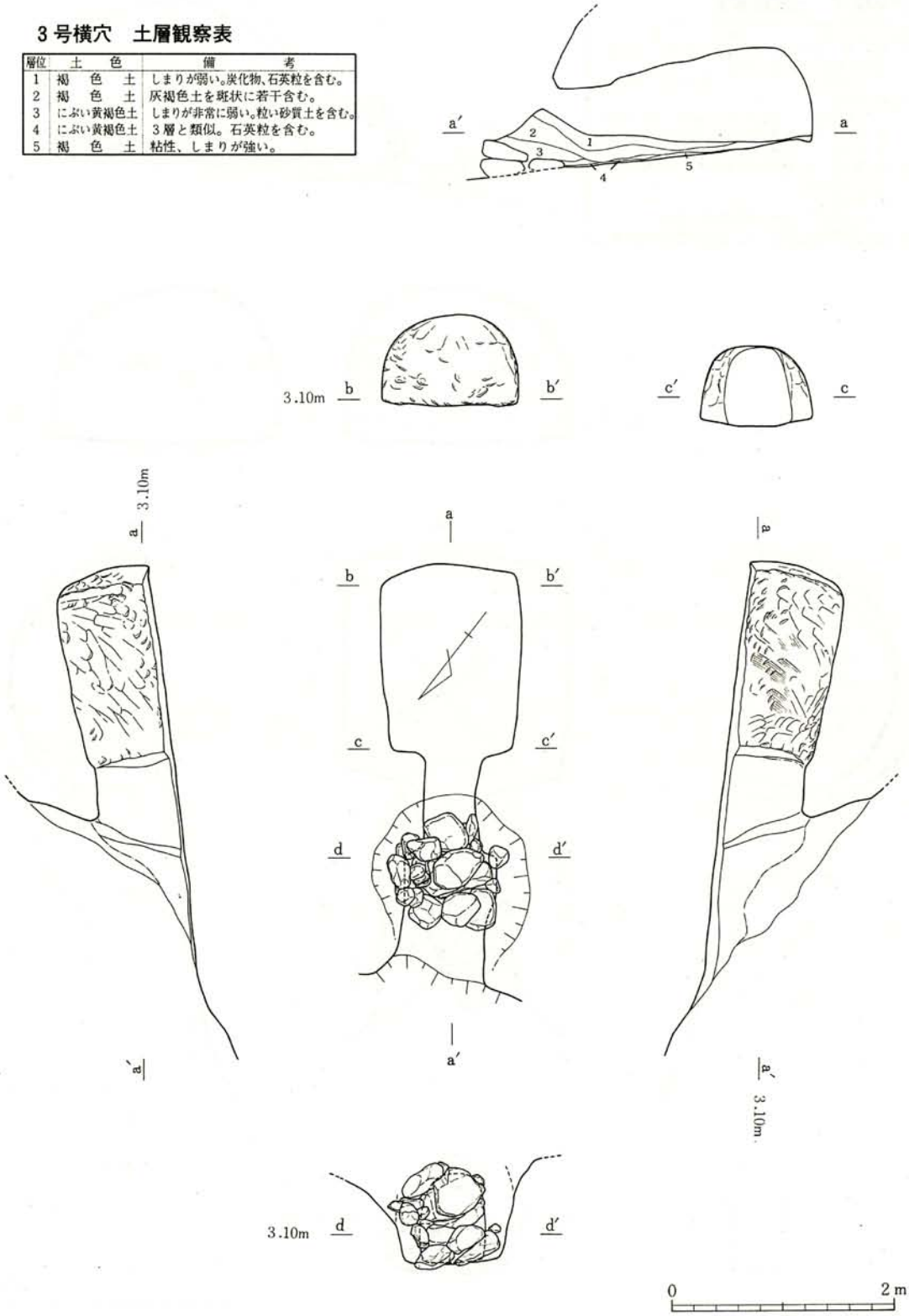
層位	土　色	備　考
1	褐　色　土	しまりが弱くパサパサしている。
2	にぶい褐色土	しまりが弱い。
3	にぶい褐色土	〃　　凝灰岩粒を若干含む。
4	暗 褐 色 土	〃
5	にぶい黄褐色土	しまりややあり。褐色土を若干混入。
6	黄 褐 色 土	崩落凝灰岩層でサラサラしている。
7	淡 黄 色 土	6層と同質。色調が白っぽい。
8	暗 褐 色 土	凝灰岩粒を含む。また、炭化物を含む。
9	にぶい黄褐色土	〃　　〃
10	黄 褐 色 土	〃　　〃
11	にぶい褐色土	小さな凝灰岩塊を含む。
12	にぶい黄褐色土	硬くしまりのある風化凝灰岩層



第5図　2号横穴実測図

3号横穴　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	褐　色　土	しまりが弱い。炭化物、石英粒を含む。
2	褐　色　土	灰褐色土を斑状に若干含む。
3	にぶい黄褐色土	しまりが非常に弱い。粒い砂質土を含む。
4	にぶい黄褐色土	3層と類似。石英粒を含む。
5	褐　色　土	粘性、しまりが強い。



第6図　3号横穴実測図

3 号 横 穴

本横穴は、２号横穴の約２ｍ南に位置している。玄室、玄門、羨道で構成された全長約３.７ｍの横穴である。

〔玄室〕　平面形はほぼ長方形を呈し、奥行1.18ｍを測る。幅は奥壁で1.22ｍ、前端で1.08ｍと奥壁よりも前端がやや狭くなる。また、奥壁はわずかにふくらみをもつ。立面形はアーチ形を呈し、高さ0.88ｍを測る。床面は玄門に向かって傾斜している。天井から両側壁や奥壁の下方部にかけては、幅約10cmの工具痕が認められる。堆積土は褐色土を基調とし、玄門付近で厚く堆積し、奥壁に行くにしたがって浅くなる。

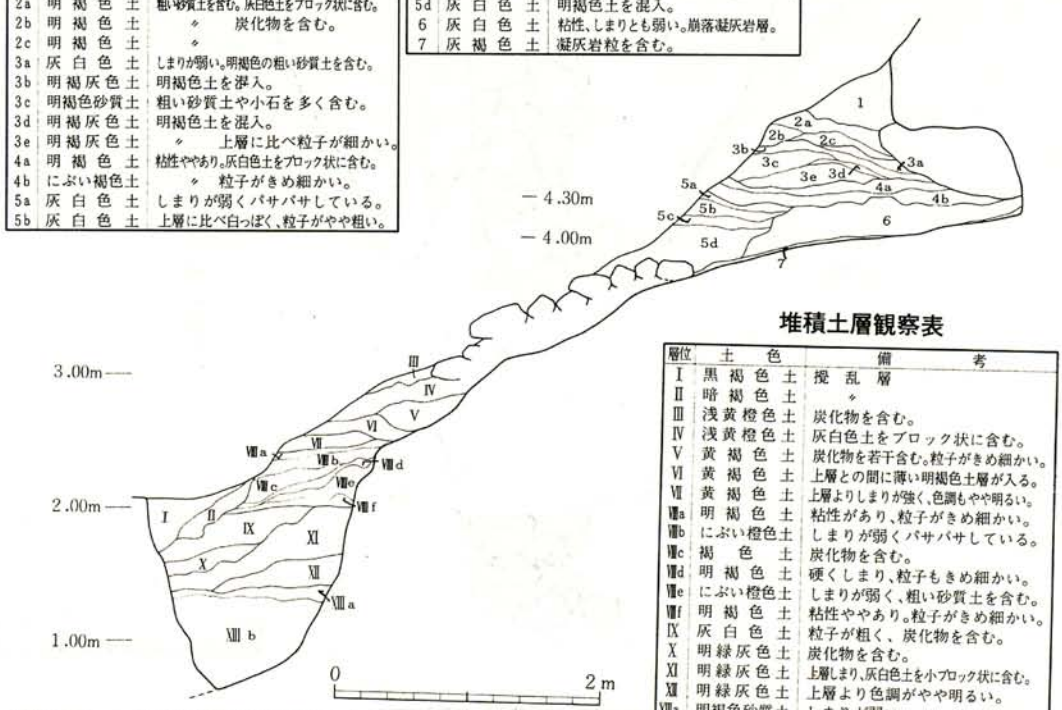
〔玄門〕　玄室のほぼ中央部に位置し、奥行82cm、幅45cmと比較的細長い。立面形はアーチ形を呈し、高さ74cmを測る。玄門前には凝灰岩切石と河原石からなる閉塞石が積み上げられている。

〔羨道〕　平面形は右側壁が外側にやや張り出すが、ほぼ長方形を呈する。奥行１.18ｍ、奥壁幅80cmを測り、天井部は存在しない。

〔出土遺物〕　閉塞石に貼り付いた状態で、鉄刀の小破片が１点出土した。鉄刀（第13図１）は刀身の大部分を欠き、形態などは不明である。

4号横穴　土層観察表

層位	土色	備考
1	明褐色土	しまりが弱くパサパサしている。
2a	明褐色土	粗い砂質土を含む。灰白色土をブロック状に含む。
2b	明褐色土	〃　炭化物を含む。
2c	明褐色土	〃
3a	灰白色土	しまりが弱い。明褐色の粗い砂質土を含む。
3b	明褐灰色土	明褐色土を混入。
3c	明褐色砂質土	粗い砂質土や小石を多く含む。
3d	明褐灰色土	明褐色土を混入。
3e	明褐灰色土	〃　上層に比べ粒子が細かい。
4a	明褐色土	粘性ややあり。灰白色土をブロック状に含む。
4b	にぶい褐色土	〃　粒子がきめ細かい。
5a	灰白色土	しまりが弱くパサパサしている。
5b	灰白色土	上層に比べ白っぽく、粒子がやや粗い。
5c	灰白色土	上層との間に薄い橙色土層が入る。
5d	灰白色土	明褐色土を混入。
6	灰白色土	粘性、しまりとも弱い。崩落凝灰岩層。
7	灰褐色土	凝灰岩粒を含む。



堆積土層観察表

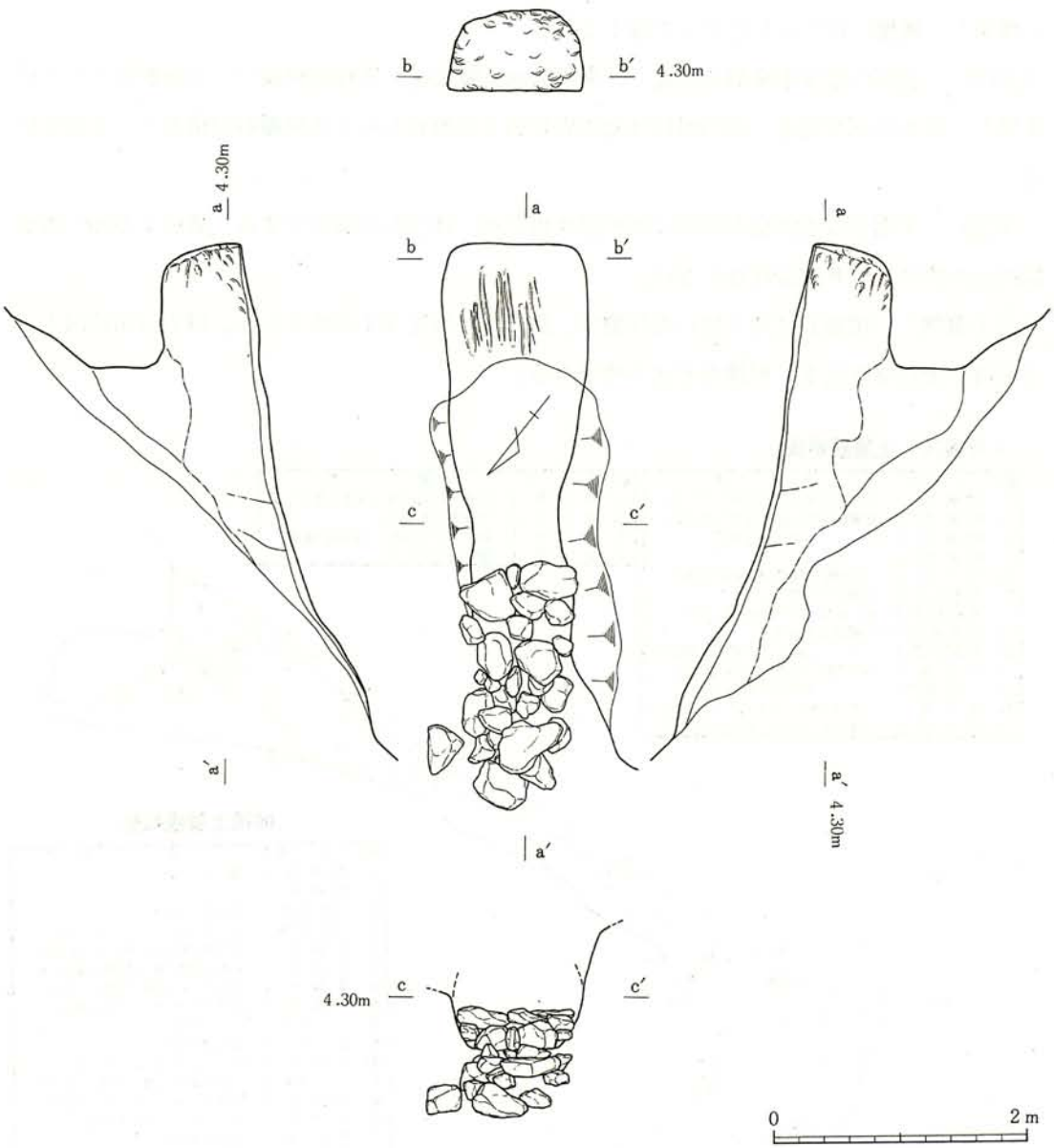
層位	土色	備考
I	黒褐色土	撹乱層
II	暗褐色土	〃
III	浅黄橙色土	炭化物を含む。
IV	浅黄橙色土	灰白色土をブロック状に含む。
V	黄褐色土	炭化物を若干含む。粒子がきめ細かい。
VI	黄褐色土	上層との間に薄い明褐色土層が入る。
VII	黄褐色土	上層よりしまりが強く、色調もやや明るい。
VIIa	明褐色土	粘性があり、粒子がきめ細かい。
VIIb	にぶい橙色土	しまりが弱くパサパサしている。
VIIc	褐色土	炭化物を含む。
VIId	明褐色土	硬くしまり、粒子もきめ細かい。
VIIe	にぶい橙色土	しまりが弱く、粗い砂質土を含む。
VIIf	明褐色土	粘性ややあり。粒子がきめ細かい。
IX	灰白色土	粒子が粗く、炭化物を含む。
X	明緑灰色土	炭化物を含む。
XI	明緑灰色土	上層しまり、灰白色土を小ブロック状に含む。
XII	明緑灰色土	上層より色調がやや明るい。
XIIIa	明褐色砂質土	しまりが弱い。
XIIIb	黄褐色砂質土	浅黄色と褐色の砂質土が交互に堆積。

第７図　４号横穴及び堆積土セクション図

4 号 横 穴

本横穴は、3号横穴の南隣にあり、約1.5m上方に位置する。玄室、玄門、羨道から構成されている。天井は奥壁付近にわずかに残存するのみである。

〔玄室〕　奥行2.0m、奥壁幅1.06m、前端幅0.86mと玄室前方に向かって幅が狭くなり、平面形はフラスコ状を呈している。高さは奥壁付近で0.76mを測り、立面形はアーチ形を呈する。床面は奥壁付近で凹凸が見られ、玄門に向かって比較的急な傾斜をみせる。奥壁には粗い工具



第8図　4号横穴実測図

痕が顕著に認められる。

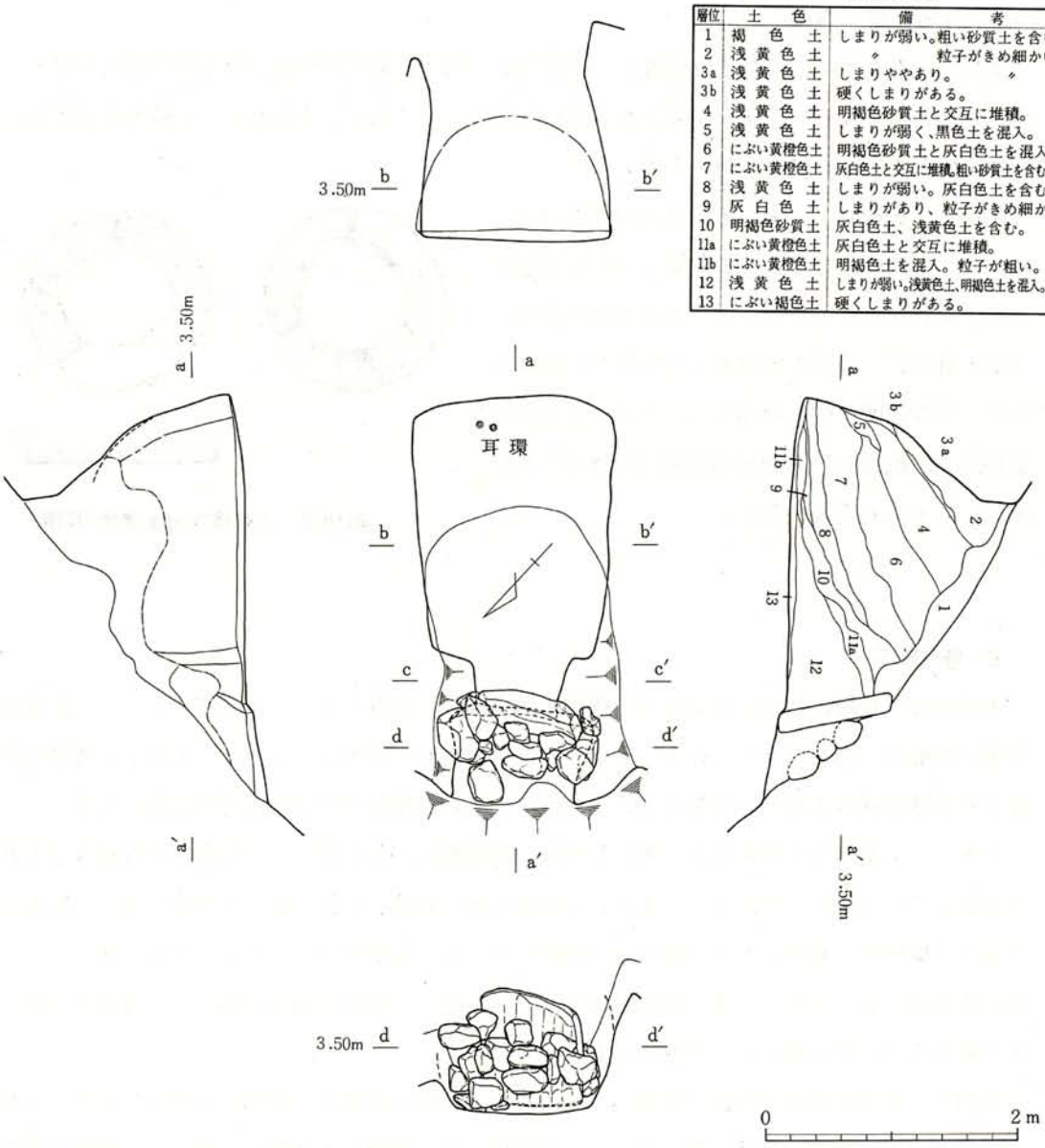
〔玄門〕　玄室と玄門の区画は明瞭でない。しかし、幅が玄室奥壁付近に比べかなり狭くなり、しかも、ややくびれることや、前方に閉塞用に用いられた凝灰岩切石が崩落した状態で確認されたことより、玄門と考えた。奥行約40cm、幅は中央で68cmを測る。

〔羨道〕　玄門同様明瞭ではない。右側壁は玄門前端から約80cm前方で外側に広がりをみせ、床面も約50cm前方で傾斜がやや急になる。

〔出土遺物〕　出土遺物は皆無である。

5号横穴　土層観察表

層位	土色	備考
1	褐色土	しまりが弱い。粗い砂質土を含む。
2	浅黄色土	〃　粒子がきめ細かい。
3a	浅黄色土	しまりややあり。　〃
3b	浅黄色土	硬くしまりがある。
4	浅黄色土	明褐色砂質土と交互に堆積。
5	浅黄色土	しまりが弱く、黒色土を混入。
6	にぶい黄橙色土	明褐色砂質土と灰白色土を混入。
7	にぶい黄橙色土	灰白色土と交互に堆積,粗い砂質土を含む。
8	浅黄色土	しまりが弱い。灰白色土を含む。
9	灰白色土	しまりがあり、粒子がきめ細かい。
10	明褐色砂質土	灰白色土、浅黄色土を含む。
11a	にぶい黄橙色土	灰白色土と交互に堆積。
11b	にぶい黄橙色土	明褐色土を混入。粒子が粗い。
12	浅黄色土	しまりが弱い。浅黄色土、明褐色土を混入。
13	にぶい褐色土	硬くしまりがある。



第9図　5号横穴実測図

5 号 横 穴

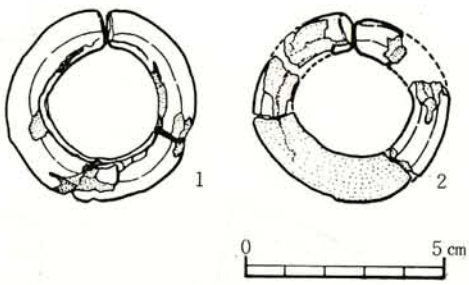
本横穴は、4号横穴の南隣に位置している。北に隣接する4号横穴より1m低く、南に接する6号横穴よりは0.8m高い位置に開口する。玄室、玄門、羨道によって構成され、全長3.2mを測る。天井はすべて崩壊し、羨道は側壁の一部が崩壊した状態で検出された。

〔玄室〕　平面形はほぼ長方形を呈し、奥行2.06m、奥壁幅1.56m、前端幅1.28mと奥壁より前端が狭くなっている。奥壁は高さ50cmを残すのみであった。床面は玄門に向かってわずかに傾斜している。堆積土は、大部分が天井崩落の後に流れ込んだものと思われ、浅黄色や明褐色の砂質土が互層に堆積している。

〔玄門〕　玄室のほぼ中央部に位置し、奥行38cm、幅は玄室側で80cm、羨道側で62cmを測る。高さ93cm、幅81cm、厚さ16cmの凝灰岩の切石を立てかけて塞ぎ、その前方に人頭大の凝灰岩切石の閉塞石を65cmの高さに積み上げていた。

〔羨道〕　奥壁幅1.24m、奥行は76cmまで残存している。平面形はほぼ長方形を呈していたと思われる。天井部が存在したかどうかは不明である。

〔出土遺物〕　玄室の奥壁近くで耳環が2点出土した。残存状態が悪く細部については不明である。第10図1は直径4.7～4.9cm、第10図2は4.5～4.9cmで、いずれも錫製である。



第10図　5号横穴出土遺物(耳環)

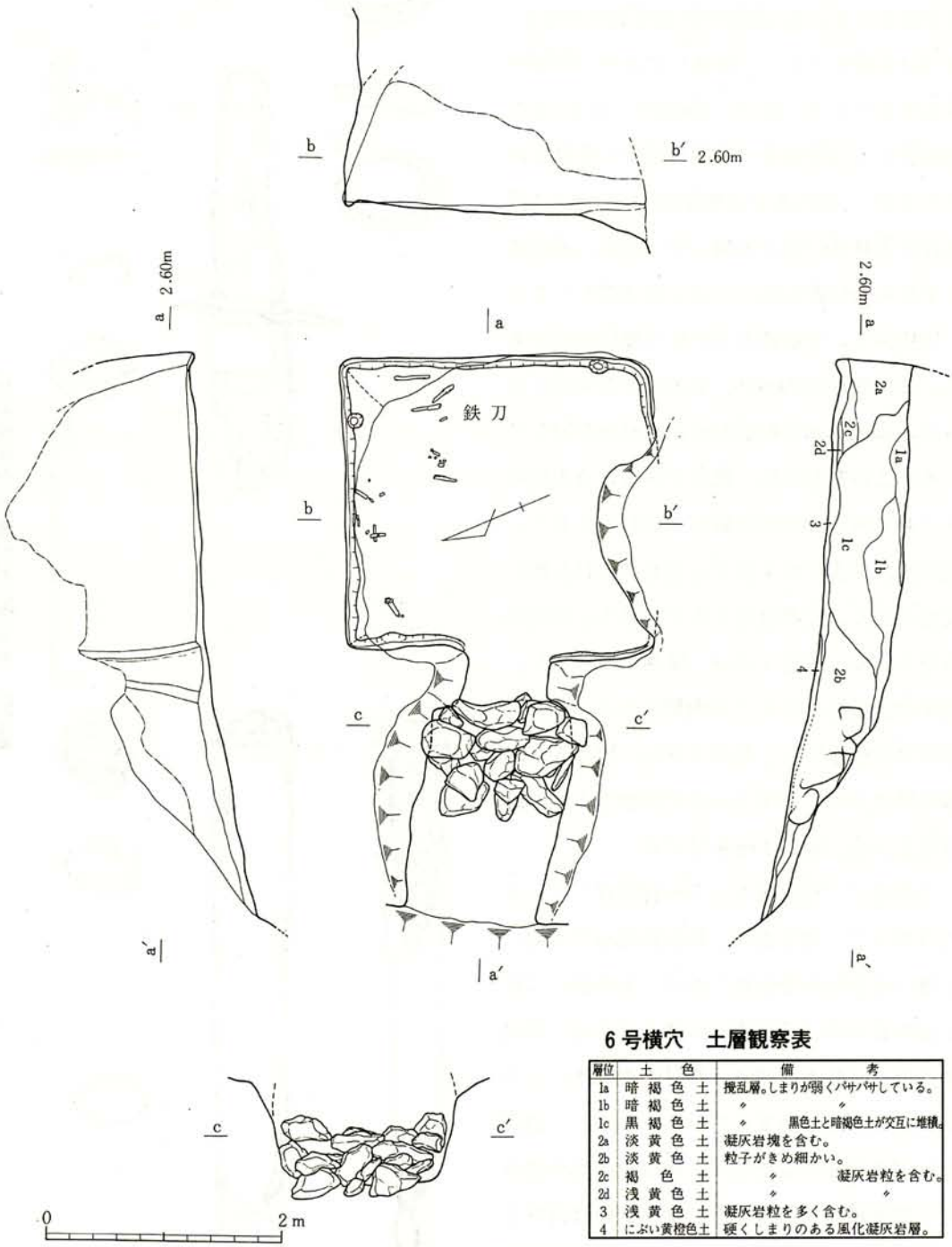
6 号 横 穴

本横穴は、丘陵西斜面に造営された横穴古墳の南端に位置する。7号横穴によって、玄室右側壁と床面の一部が切られている。玄室、玄門、羨道から構成されており、天井及び側壁は崩壊した状態で検出された。全長4.8mを測り、本横穴古墳群の中では大型の部類に入る。

〔玄室〕　平面形は方形を呈し、奥行2.50m、奥壁幅2.60mを測る。立面形は両側壁及び天井が崩壊しているため不明である。また、工具痕も壁の剝落、風化が著しく明瞭でない。床面は平坦で、奥壁から玄門にかけて緩やかに傾斜している。各壁ぎわには幅4～6cm、深さ2～3cmの排水溝が巡らされている。断面形は「し」状を呈し、床面は凹凸が激しい。堆積土は第1層が攪乱土で、第2層以下が崩壊土と考えられる。

〔玄門〕　玄室のほぼ中央部に位置し、奥行42cm、幅68cmを測る。玄門の方向は、玄室の主軸方向に対して、西で7度北に偏している。玄門前には、河原石と方形状に加工した凝灰岩切石の閉塞石が検出された。閉塞石は2、3段に積み上げられているが、上部は崩落している。

〔羨道〕　奥行1.85m、幅1.20mを測る。側壁は玄門前で床面から1.2mの高さまで残っている。主軸の方向は、玄門と同様に西で7度北に偏している。また、床面は前方に向かうにしたがって、しだいに傾斜がきつくなり、玄門前端から約2.4m前方で急激に下降する。



6号横穴　土層観察表

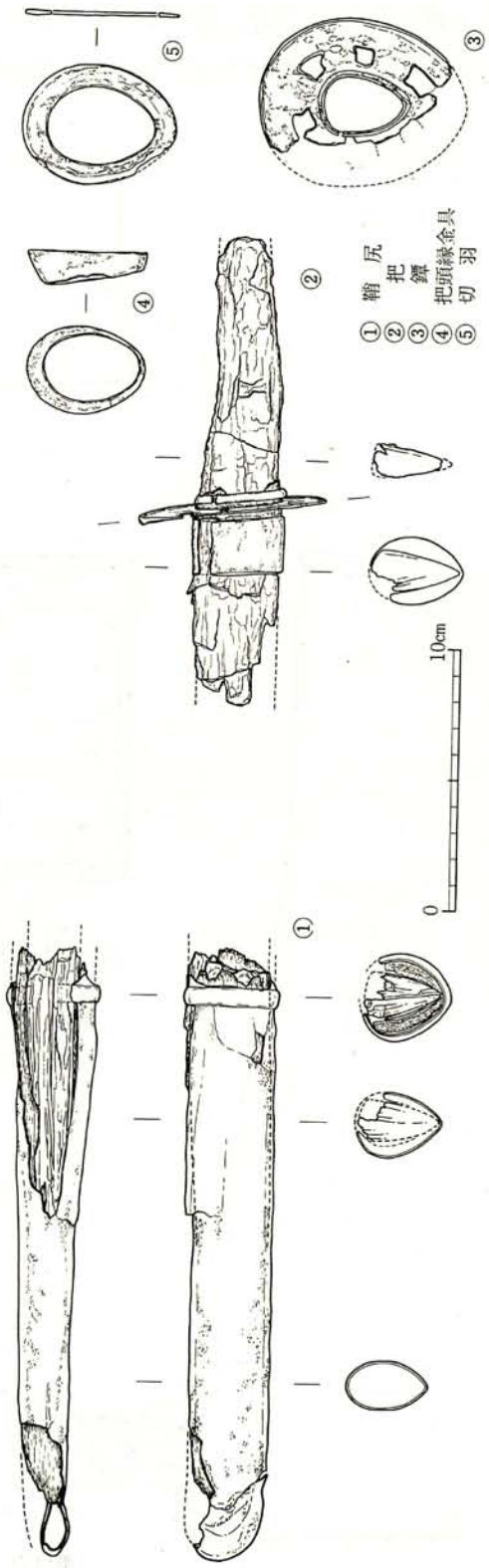
層位	土色	備考
1a	暗褐色土	撹乱層。しまりが弱くパサパサしている。
1b	暗褐色土	〃　〃
1c	黒褐色土	〃　黒色土と暗褐色土が交互に堆積。
2a	淡黄色土	凝灰岩塊を含む。
2b	淡黄色土	粒子がきめ細かい。
2c	褐色土	〃　凝灰岩粒を含む。
2d	浅黄色土	〃　〃
3	浅黄色土	凝灰岩粒を多く含む。
4	にぶい黄橙色土	硬くしまりのある風化凝灰岩層。

第11図　6号横穴実測図

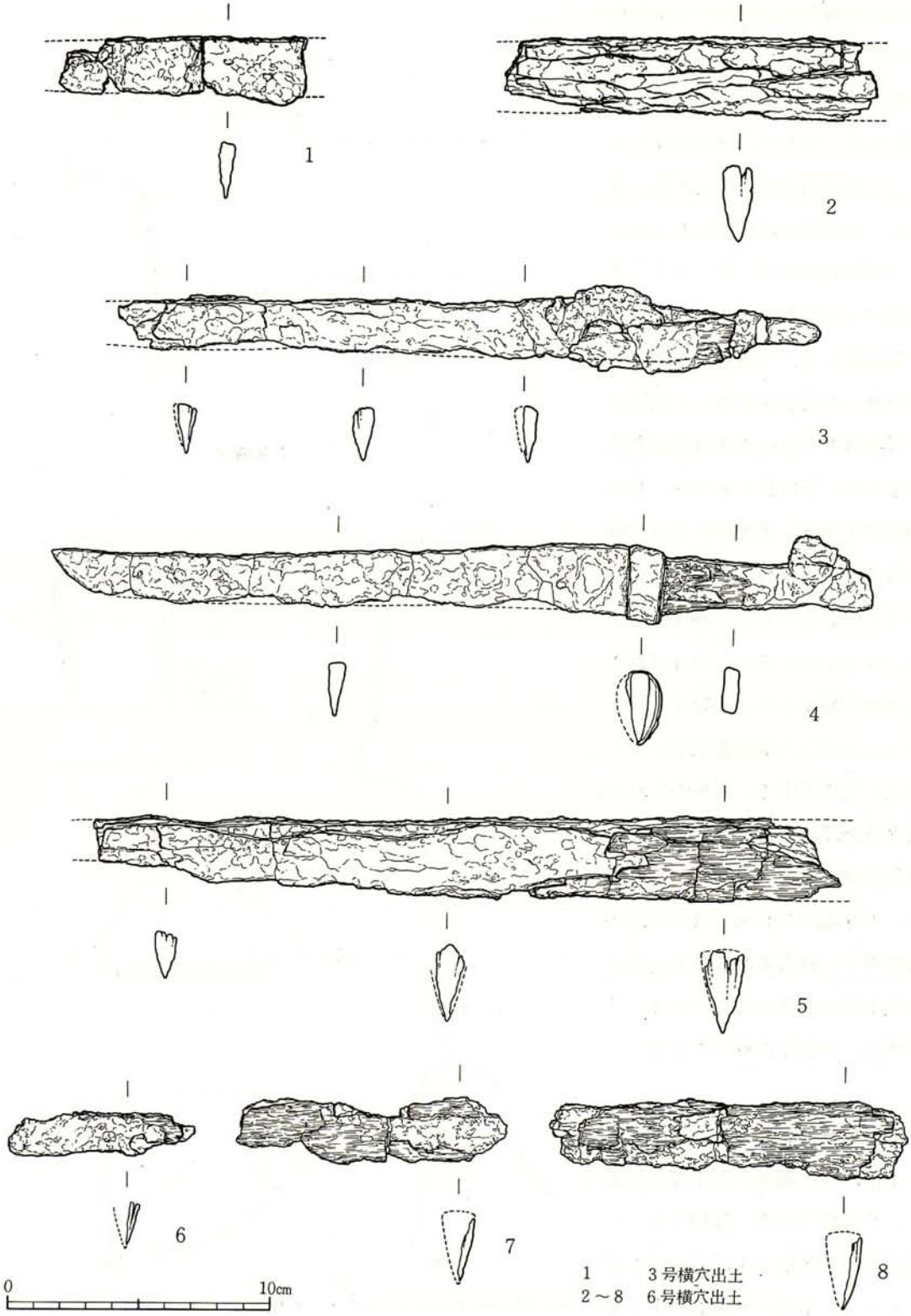
〔出土遺物〕　本横穴からの出土遺物としては、金銅装大刀、鉄刀がある。遺物は、いずれも玄室床面直上の第３層から出土しており、玄室中軸線より左側の側壁添いから奥壁にかけて分布している。遺物の出土状況をみると、鉄刀は小破片となって散在しており、原形が復元できたものは僅かに1振のみである。また、金銅装大刀は把部分が玄門付近から発見されたのに対し、鞘尻部分は奥壁近くで出土し、把頭及び刀身部の⅔が欠損しているなど、遺物はいずれも原位置を保っているとは思われない。

第12図は、金銅装大刀の把と鞘尻部分である。茎は残存長10cmで、茎尻部分が欠損している。幅は３cmで断面形がクサビ形を呈している。この把部には、把木とみられる木質片とともに薄い金銅板の破片が付着しており、金銅板の表面に蕨手状文と思われる打ち出し文様があり、把間金具と考えられる。切羽は長径５.８cm、短径４.５cm、厚さ１mmを呈し、把頭の縁金具とともに金銅製である。鐔は６窓の倒卵形を呈し、長径７.９cm、短径６.６cm、縁の厚さ３mm、身厚１mmの金銅製である。鎺は径３.５cm、幅２.１cmを呈する。

刀身部は、鎺前端から５cm程残存しているだけである。鞘尻部は、残存長21cmで表面には薄い金銅板が巻かれており、欠損部には幅７mmの責金具（二の責）が認められる。金銅板内側には鞘木が残り、鋒付近の鞘木には木製の目釘が打ち込まれている。しかし、銹のため刀身が膨らんでおり、鞘尻先端部が潰れて一部欠損しているなど、保存状態は良好とは言えない。鞘尻は丸尻を呈している。この



第12図　６号横穴出土遺物（金銅装大刀）



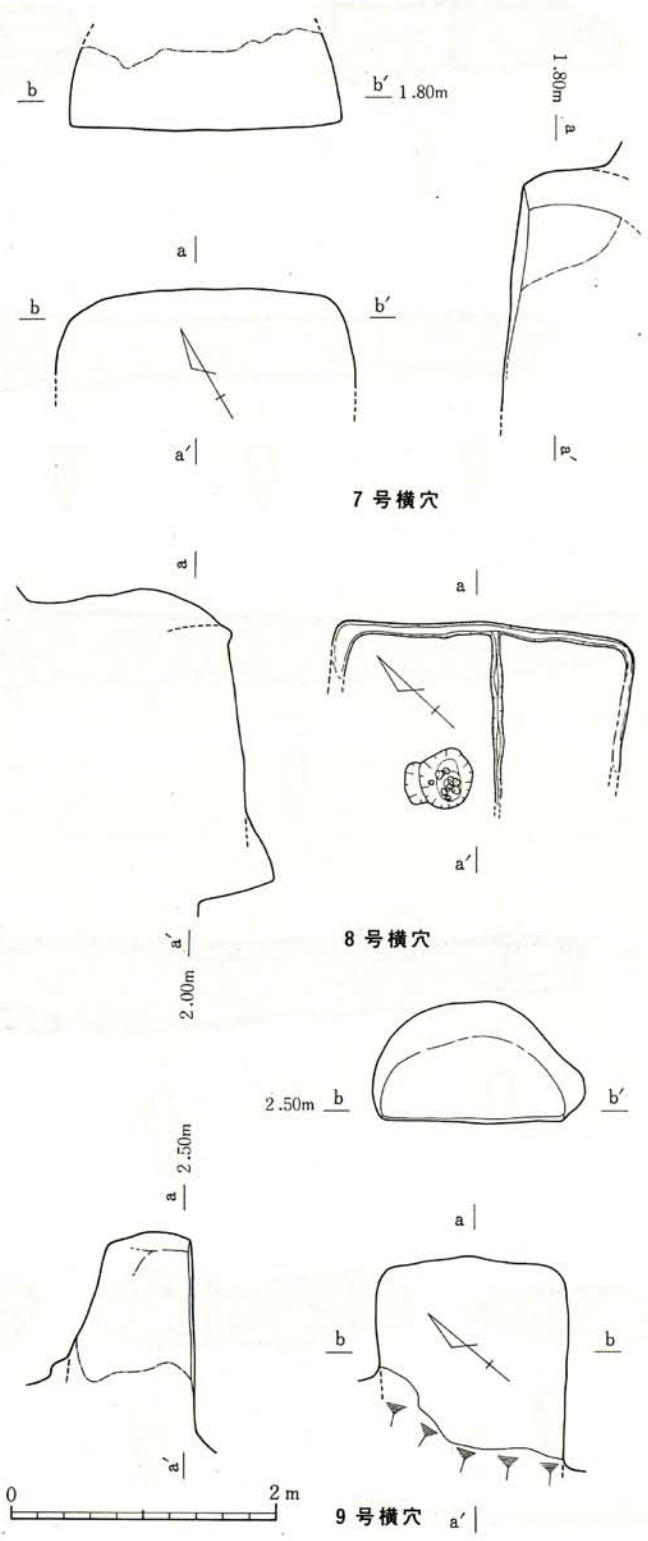
第13図　出土遺物(鉄刀)

鞘尻部の責金具に接合する金銅板の破片が出土している。この金銅板の表面には、上・下二段に円文の打ち出しがあり、それを囲むように二重の列点文が施文され、さらに、金銅板の両縁部にもスリット文様が刻まれている。おそらく佩表に当る伏板と思われる。

第13図４は、本調査出土鉄刀の中で唯一の完形品であり、茎尻から刀身鋒まで31cmを測る小形の鉄刀である。茎は長さ８.０cm、幅は関部で２.１cm、尻部で１.２cmの細尻形で、厚さ０.５cmを測り、両関タイプのものである。鋩は径２.７cm、幅１.２cmを測り、刀身は長さ21.８cm、幅２.１cm、背幅０.６cmを測る。３は、玄室左奥壁添いから出土した鉄刀片で、刀身幅２.０cm、残存長26.５cmである。５は、玄室左側中央部付近から出土したもので、刀身幅約３.０cm、残存長28.０cmを測る。鉄刀表面に鞘木と思われる木質の痕跡が認められる。その他は、小破片の鉄刀である。

７号横穴

本横穴は、調査区の南端に位置し、６号横穴の南に隣接する。６号横穴の右側壁と床面の一部を切っており、本横穴古墳群の中では唯一重復関係にある。玄室は、床



第14図　７・８・９号横穴実測図

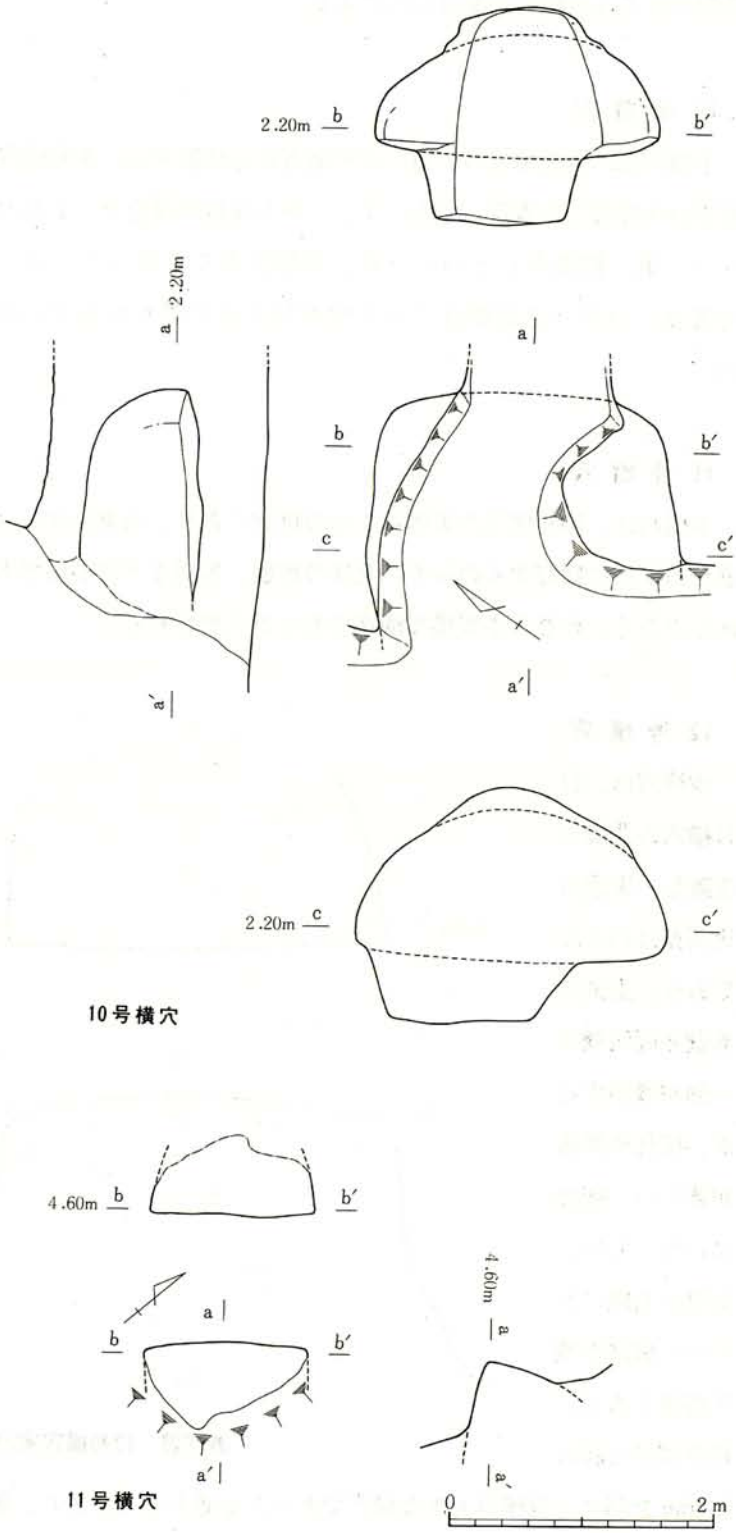
面及び奥壁がわずかに残存し、痕跡をとどめている。6号横穴の床面とは、0.9mの比高差がある。

8 号 横 穴

本横穴は、7号横穴の西隣に位置する。標高は7号横穴とほぼ同じである。玄室の残存状況はきわめて悪く、排水溝の一部のみが認められる。その状況から、奥壁の幅は約2.1mと推定できる。排水溝は壁ぎわを回っているものと、中央を縦断するものがあり、幅8～15cm、深さ2～4cmを測る。また、玄室内中央部左寄りの位置で不整円形のピットを検出した。ピット内には5cm大の玉石が中央に集積されている。性格は不明であるが、横穴に付随する施設とは考え難い。

9 号 横 穴

本横穴は、6号横穴の東側、10号横穴の上方に位置する。南向きに開口し、玄室の一部が残存している。奥壁幅は1.42mを測る。立面形は天井が剝落している



第15図　10・11号横穴実測図

ため明瞭ではないが、アーチ形を呈していたものと思われる。床面は凹凸が激しい。本横穴古墳群の中では比較的小型のものである。

10 号 横 穴

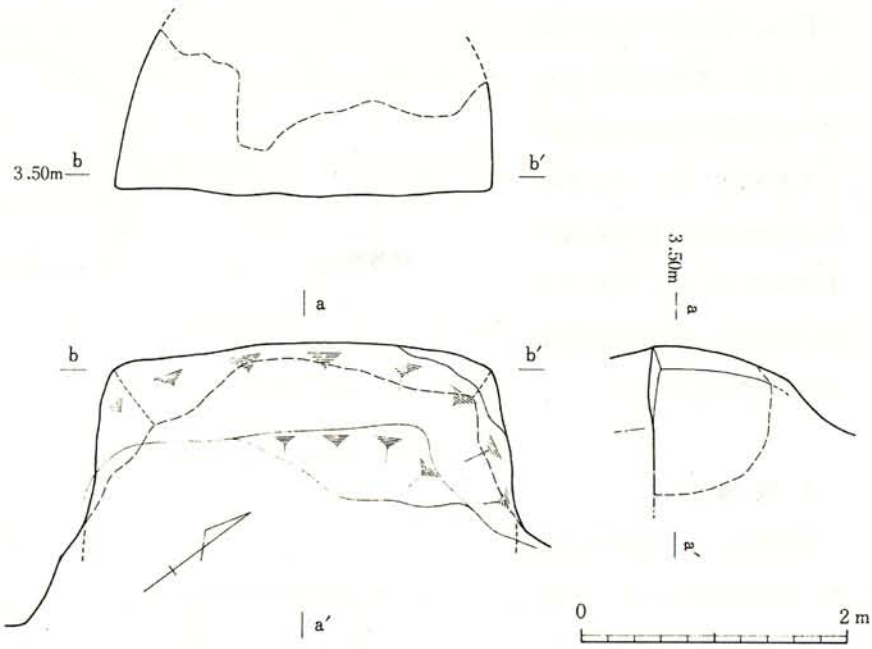
本横穴は、9号横穴の下方、やや東寄りに位置する。9号横穴との比高差は約1.5mである。玄室の半分程しか残存しておらず、しかも後世の改造で、玄室の中央部を上下に掘削され、さらに、奥へ拡張されているため、原形をかなり失っている。奥壁の両隅コーナーは丸味を帯びている。立面形はアーチ形を呈すると思われるが、改造が著しいため判然としない。

11 号 横 穴

本横穴は、10号横穴の東側約4mの位置にあり、南東に向かって開口する。玄室の床面と奥壁がわずかに残存するのみで、全体の形態、規模などは不明である。しかし、奥壁幅が約1.2mしかなく、かなり小規模な横穴であったと思われる。

12 号 横 穴

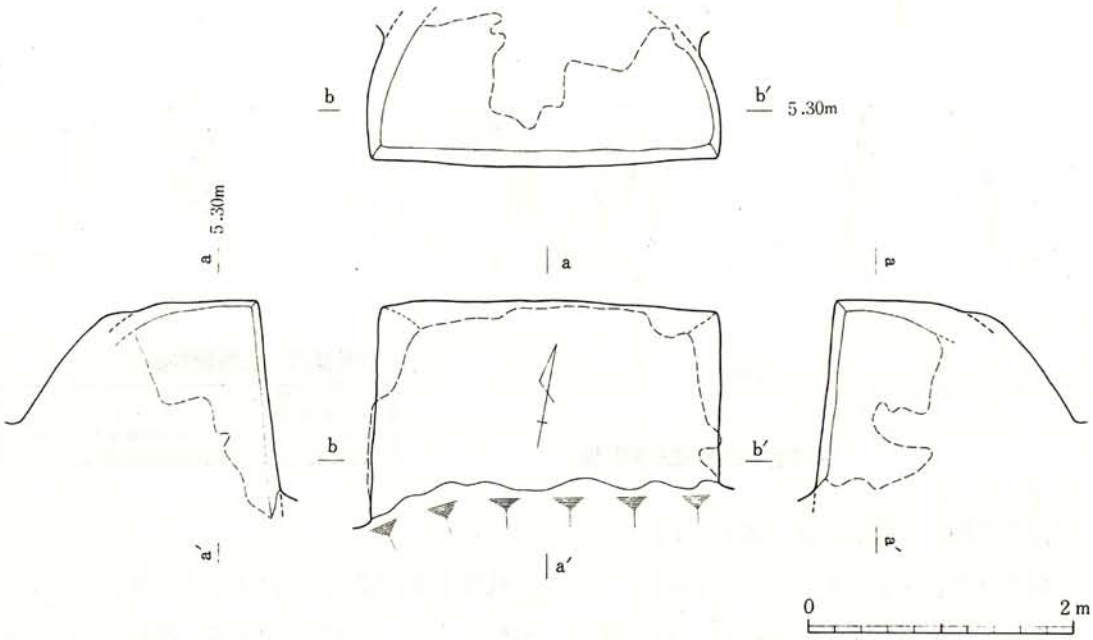
本横穴は、11号横穴の北隣に位置し、床面の比高差は約2mである。玄室の奥壁と両側壁の一部が残存するが、風化や剝落が著しい。床面にいたっては、奥壁の右隅にわずかに痕跡を残す程度である。残存部での幅は2.86mを測り、規模の大きな横穴であったと思われる。また、奥壁の両隅には床面から約1.2mの高さまで、不明瞭ながら稜線が認められる。



第16図　12号横穴実測図

13 号 横 穴

本横穴は、12号横穴の東側約5.5ｍに位置し、南に向かって開口している。玄室は半分程が残存するのみで、天井は崩壊している。そのため、平面形、断面形とも判然としない。奥壁幅は2.58mを測り、12号横穴と同様に奥壁と側壁を明瞭に区画する稜線が、床面から約90cmの高さまで残っている。



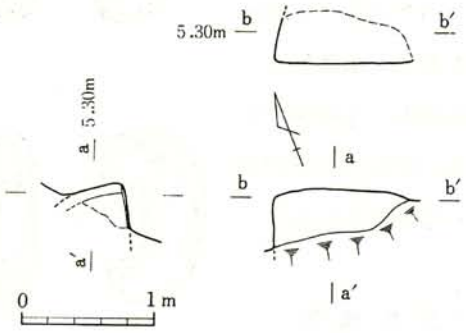
第17図　13号横穴実測図

14 号 横 穴

本横穴は、13号横穴の東に隣接し、ほぼ同じ高さに開口している。崩壊が著しいため形態は不明であるが、奥壁残存幅が約1ｍしかなく、かなり小規模な横穴であった可能性が強い。

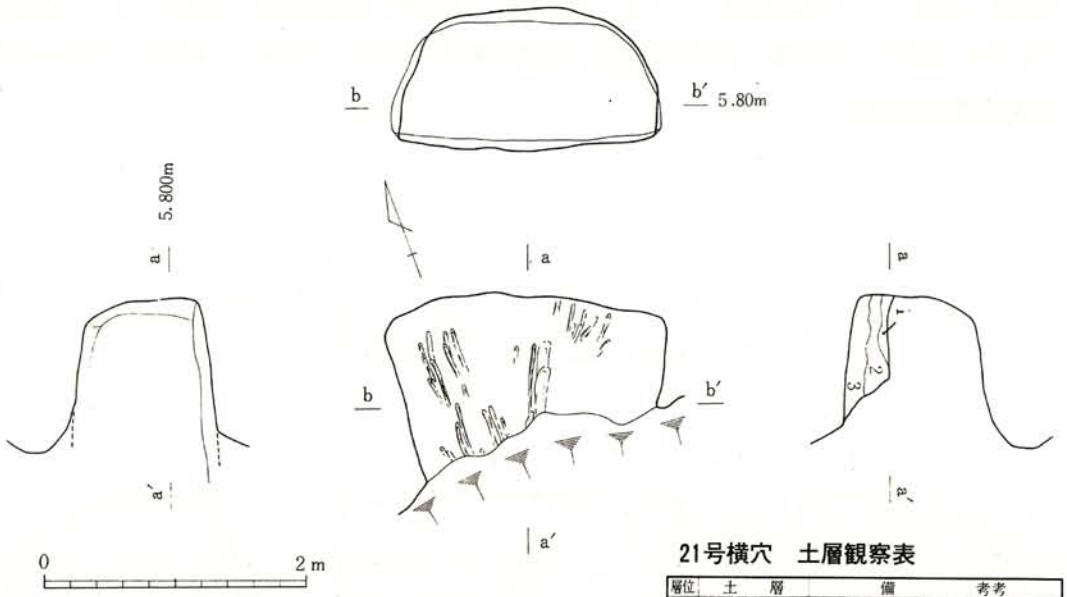
21 号 横 穴

本横穴は、丘陵南崖面のほぼ中央に位置する。玄室の約半分程しか残存しておらず、奥壁幅2.10ｍを測る。平面形は扇形状を呈すると思われ、立面形は変形アーチ形である。床面には、溝状の細かな凹凸が放射状に認められる。堆積土は約25cm



第18図　14号横穴実測図

の厚さで均一に堆積している。土層は灰黄褐色、灰褐色を呈し、３層に分けられる。



第19図　21号横穴実測図

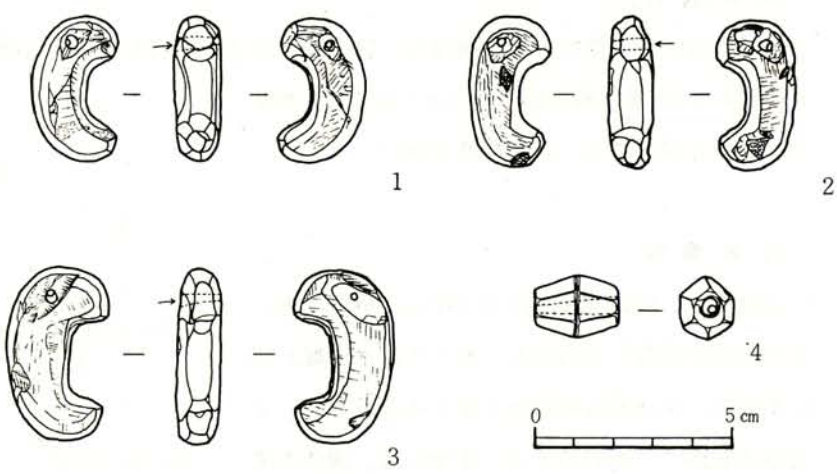
21号横穴　土層観察表

層位	土　層	備　考
1	灰黄褐色土	しまりが弱くパサパサしている。
2	灰褐色土	粘性、しまりややあり。明褐色砂質土を斑状に含む。
3	灰褐色土	淡黄色土と交互に堆積。

〔出土遺物〕　勾玉３点、切子玉１点が出土している。

勾玉（第20図１～３）　１は床面上、２、３は堆積土第３層中より出土した。長さは、順に3.7㎝、3.9㎝、4.4㎝を測る。いずれもメノウ製で「コ」の字形を呈する。穿孔は一方向からなされており、中央のくぼみを正面とした場合、その穿孔方向は左→右（１・３）、右→左（２）である。３例とも孔口、孔尻が穿孔の際に不整円形に剝離し、その剝離面は研磨されている。

切子玉（第20図４）床面上より出土したもので、長さ2.2㎝を測る。水晶製で、断面形は六角形である。穿孔は一方向からなされている。



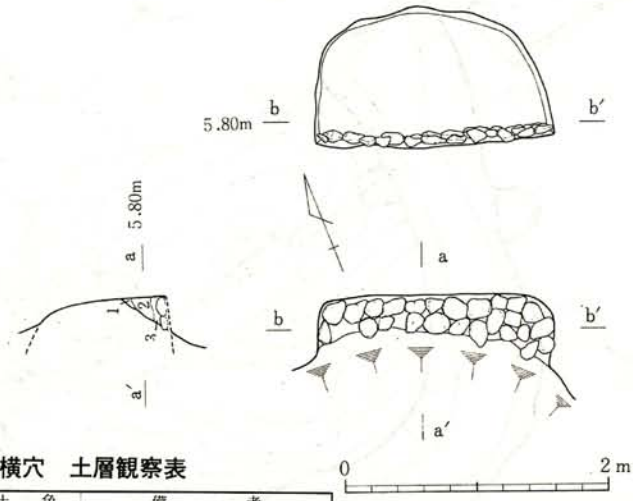
第20図　21号横穴出土遺物（勾玉・切子玉）

22 号 横 穴

本横穴は、21号横

穴の東隣に位置し、ほぼ同じ高さに開口している。大部分が崩壊しているため、残存部は玄室奥壁付近のわずかだけである。

したがって、平面形は不明であり、立面形も判然としないが、ほぼアーチ形を呈すると思われる。床面には、直径10～20cmの円礫が平坦に敷きつめられている。堆積土は奥壁付近にわずかに認められ、3層に分けられる。第1層は天井や壁の崩壊土で浅黄色を呈する。第2層と第3層は暗褐色を呈し、第3層の方が、より粘性が強く、しまりのある土層である。



22号横穴　土層観察表

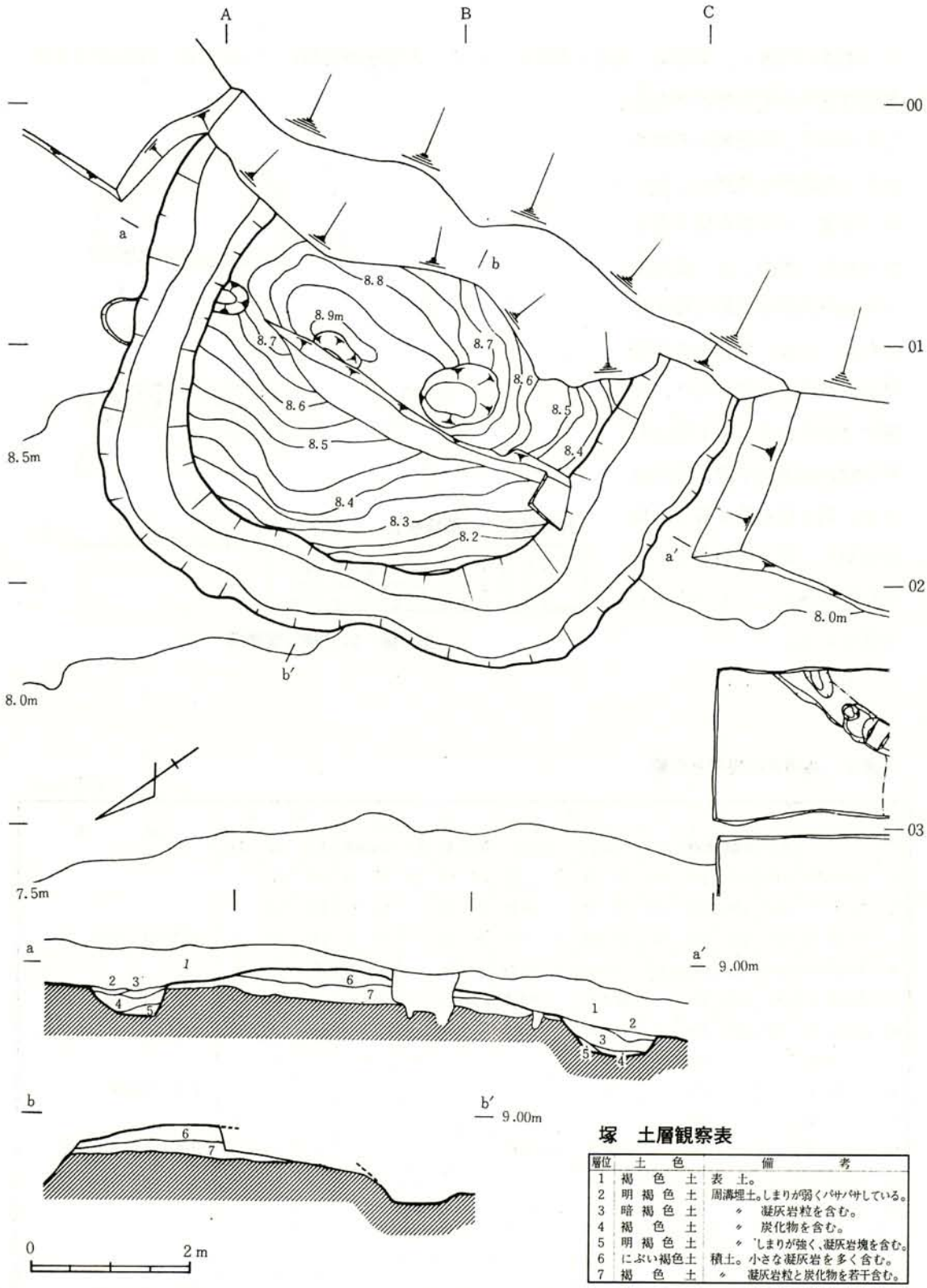
層位	土色	備考
1	浅黄色土	しまりが弱い。凝灰岩粒を含む。
2	暗褐色土	粘性ややあり。粘性のない暗褐色土を混入。
3	暗褐色土	粘性あり。色調がやや灰色気味。

第21図　22号横穴実測図

表2　各横穴の規模と形態

（単位：cm）

横穴番号	主軸方向	玄室						玄門				羨道			備考
		奥行	前端幅	奥壁幅	高さ	平面形	立面形	奥行	幅	高さ	閉塞施設	奥行	幅	高さ	
1	N-84°-W	170	134	160	104	方形	変形ドーム形	66	62	80	切石	180	90	—	
2	N-50°-W	210	198	196	140	方形	ドーム形	94	54	—	切石	120	116	—	
3	N-38°-W	170	108	122	88	長方形	アーチ形	82	45	74	切石	118	80	—	玄門ー鉄刀出土
4	N-37°-W	200	86	106	76	フラスコ形	アーチ形	40	68	—	切石	152	80	—	
5	N-43°-W	206	128	156	—	長方形	アーチ形？	38	68	—	段・切石	76	124	—	玄室ー耳環2点出土
6	N-67°-W	250	260	258	—	方形	ドーム形？	42	68	—	切石	185	120	—	玄室ー排水溝 金銅装大刀、鉄刀出土
7	S-25°-W	—	—	230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
8	S-48°-W	—	—	210	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	玄室ー排水溝
9	S-50°-W	—	—	142	—	—	アーチ形？	—	—	—	—	—	—	—	
10	S-60°-W	—	—	220	—	方形？	アーチ形	—	—	—	—	—	—	—	戦事中防空壕に改造
11	S-59°-E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
12	S-53°-E	—	—	286	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
13	S-11°-E	—	—	258	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
14	S-20°-W	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
21	S-21°-W	—	—	210	—	扇形	変形アーチ形	—	—	—	—	—	—	—	玄室ー勾玉3点 切子玉1点出土
22	S-21°-W	—	—	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	玄室ー石敷



塚　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	褐　色　土	表　土。
2	明 褐 色 土	周溝埋土。しまりが弱くパサパサしている。
3	暗 褐 色 土	〃　凝灰岩粒を含む。
4	褐　色　土	〃　炭化物を含む。
5	明 褐 色 土	〃　しまりが強く、凝灰岩塊を含む。
6	にぶい褐色土	積土。小さな凝灰岩を多く含む。
7	褐　色　土	〃　凝灰岩粒と炭化物を若干含む。

第22図　塚実測図

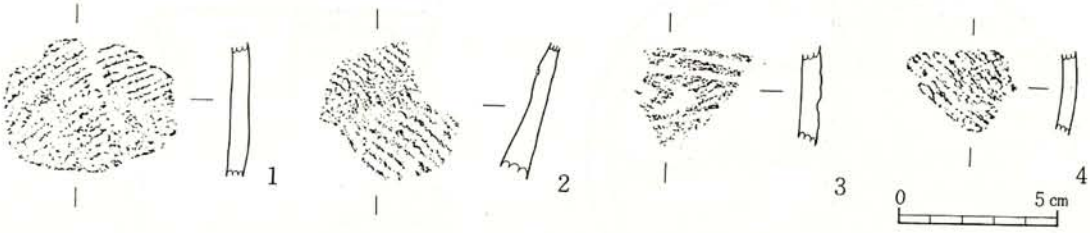
塚

調査区内の丘陵頂部付近で検出した周溝を伴なう塚である。西向きの緩い傾斜面に立地している。周溝は地山面で検出され、その地山上に直接積土されている。本遺構は、東半部が既に失なわれており、残された西半部についてみると、その周溝の在り方から平面形が隅丸方形（或いは長方形）を呈していたものと思われる。

〔周溝〕　上幅0.8～1.5m、下幅0.3～1.0m、深さ0.35～0.45mを測り、場所によってばらつきがある。壁は緩い傾斜をもって掘り込まれている。埋土は、積土の崩壊土と思われる明褐色～褐色土が、逐次自然堆積した状況を呈している。

〔積土〕　北西コーナー付近では、地山が露出していたが、他の部分では積土が2層認められた。いずれも厚さ約10cmである。版築してつき囲めたような状況は見られなかった。

〔出土遺物〕　縄文土器片（第23図）が、周溝埋土及び積土より数点出土している。



第23図　塚出土遺物（縄文土器）

2．遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、土師器壺、須恵器甕・壺・提瓶のほか、石製紡錘車と金環がある。これらはすべて丘陵西斜面の裾部から出土している。

土 師 器

壺（第24図1）　2号横穴と3号横穴前方の崩壊土より出土した。口縁部は、頸部から直線的に外傾して立ち上がり、端部でやや外反しながら外側につまみ出されるようにして丸くおさまる。体部はほぼ球形を呈し、底部は平底で若干上げ底気味である。器面調整は、口縁部内外面をヨコナデ、体部の外面全体をヘラミガキしているが、体部下端部はヘラケズリしている。内面には若干ヘラナデを施している。

須 恵 器

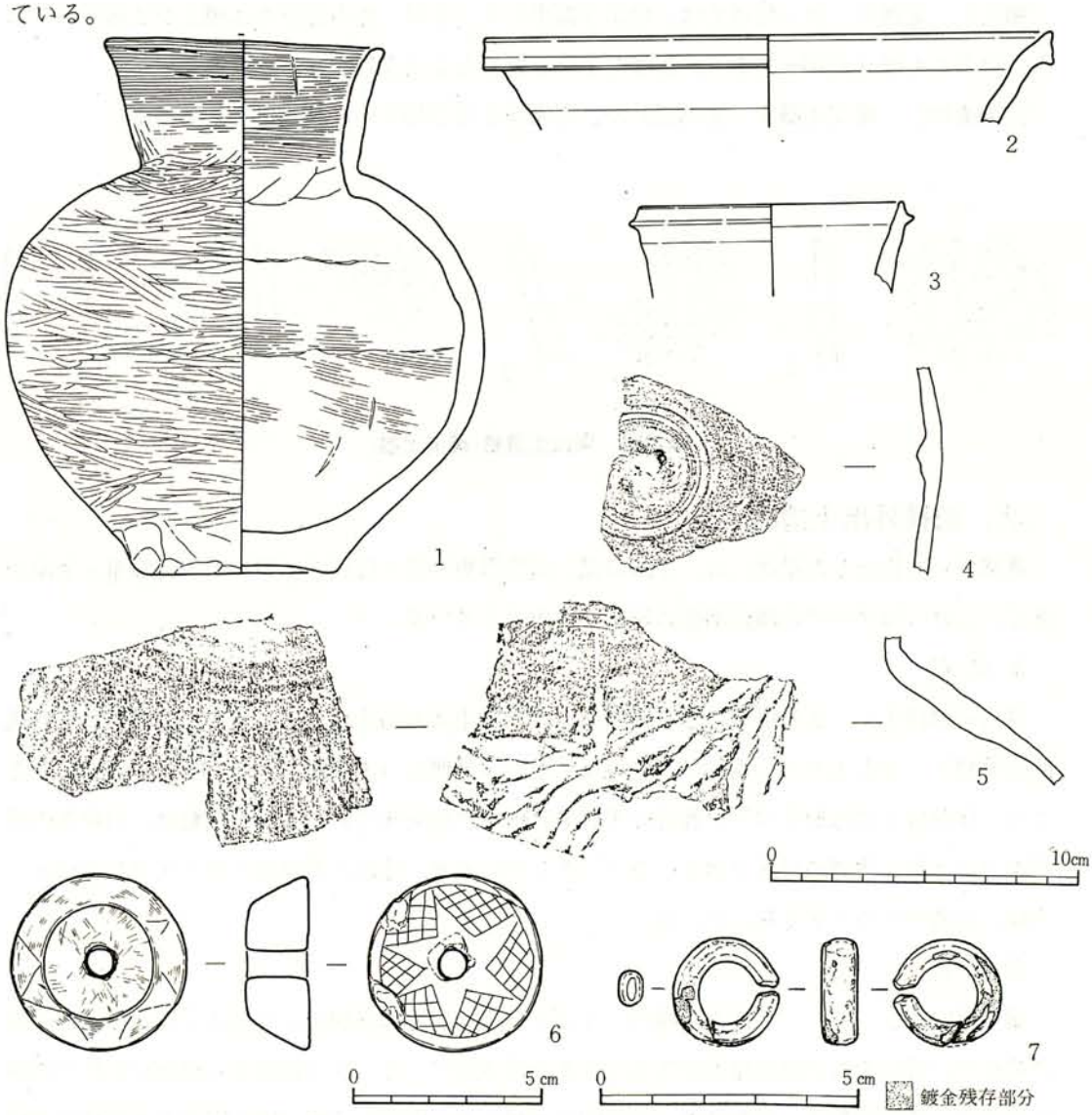
甕（第24図2・5）　2は1号横穴、5は3号横穴前方の崩壊土より出土した。2は口縁部の破片で、外反する口縁の端部が下方につまみ出されている。5は頸部から肩部にかけての破片である。器面調整は、肩部外面に平行叩きが施され、内面には粗い同心円文のあて具痕が認められる。

壺（第24図３）　１号横穴前方の崩壊土より出土した口縁部の破片である。口縁端部で横方向につまみ出され、鋭い口縁帯にしている。

提瓶（第24図４）　３号横穴前方の崩壊土より出土した体部の破片である。

紡錘車（第24図６）　丘陵西斜面裾部の攪乱層より出土した。直径は上面で３.１㎝、下面で４.７㎝、厚さ１.６㎝を測り、孔の直径は０.７㎝である。石質は滑石で、側面及び下面に鋸歯文の線刻を施している。また、上面と側面には擦痕が認められる。

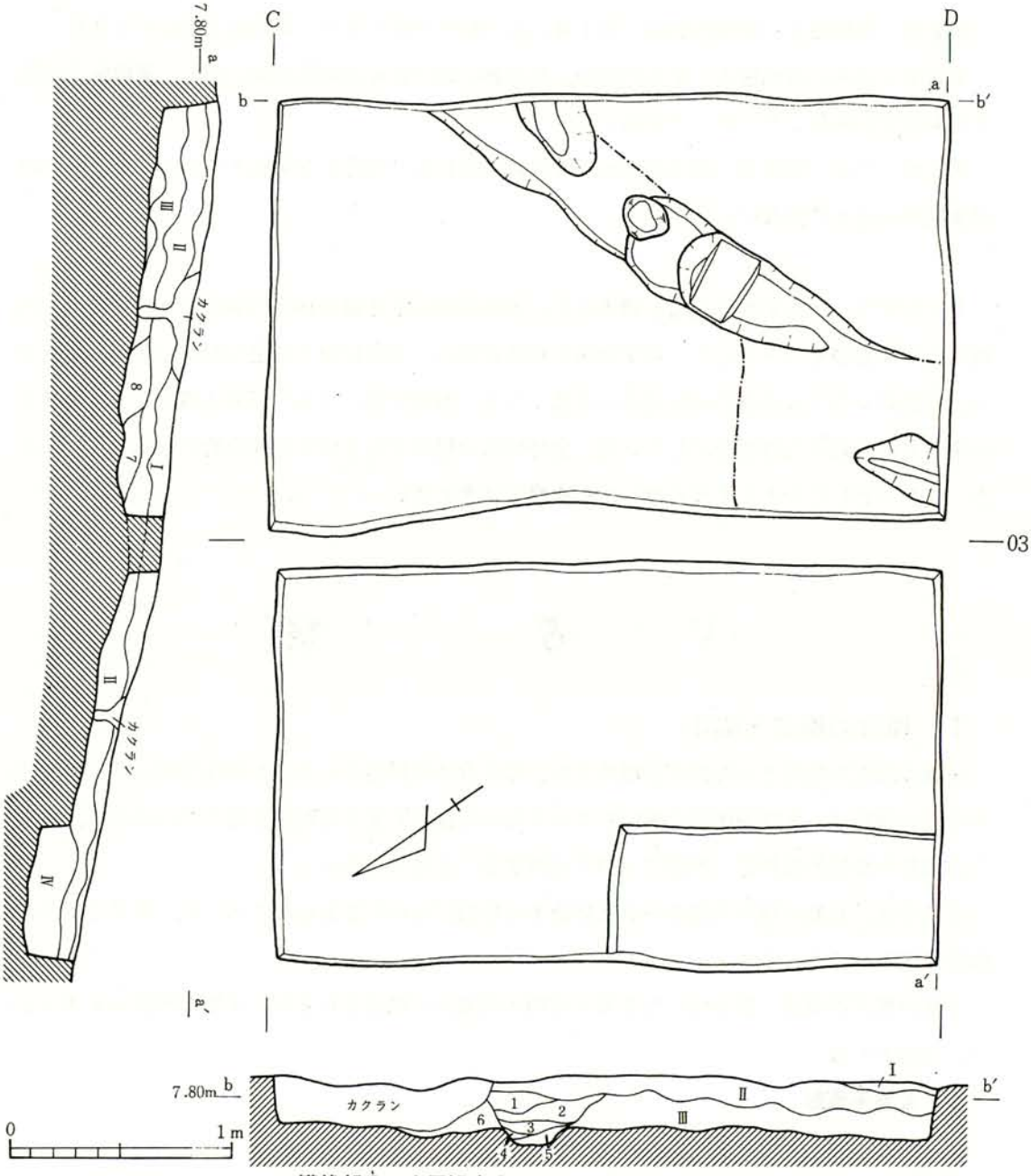
金環（第24図７）　表採品である。銅地に鍍金したもので、ほぼ円形を呈し、最大外径が２.１㎝を測る。断面形はほぼ楕円形で、長径０.７㎝、短径０.５㎝である。鍍金は大部分が剝落している。



第24図　遺構外出土遺物　１．土師器壺　２・５．須恵器甕　３．須恵器壺　４．須恵器提瓶　６．紡錘車　７．金　環

3．火山灰層下の調査

丘陵頂部付近のD－03、04グリットにおいて、火山灰層下の遺構、遺物の検出を目的として、2m×3mのトレンチを2ケ所に設定した。



Ⅰ～Ⅳ　基本層位

溝状部分　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	にぶい褐色土	粘性あり。風化凝灰岩塊を含む。
2	黄褐色土	やや砂質気味。
3	にぶい褐色土	風化凝灰岩層。
4	にぶい褐色土	3層と類似。粘性がやや強い。

層位	土　色	備　考
5	灰黄褐色土	灰白色と黄褐色の凝灰岩層が交互に堆積。
6	黄褐色土	やや砂質気味。
7	褐色土	風化凝灰岩塊を若干含む。
8	褐色土	粘性が強い。風化凝灰岩塊を含む。

第25図　火山灰層実測図

基本層位

層位は、基本的に以下の４層に分けられる。

第Ⅰ層：灰褐色土　厚さ約５㎝。粘性に乏しい火山灰層で、表土（褐色土）の粒子が混じる。

第Ⅱ層：黄褐色土　厚さ約10㎝。第Ⅰ層に比べ粘性が強くなり、黄橙色土の粒子を含む。

第Ⅲ層：にぶい黄褐色土　厚さ約15㎝。第Ⅱ層に比べさらに粘性が強くなり、黄橙色土の粒子と凝灰岩の風化したブロックが混じる。

第Ⅳ層：にぶい褐色土　厚さ約15㎝、凝灰岩の割れ目に浸透した腐蝕土である。第Ⅲ層との前後関係は定かではない。

Ｄ－03グリットの第Ⅲ層上面を精査中に、東西方向に走る幅約40㎝の溝状プランを検出した。堆積土は第Ⅲ層をベースとし、若干赤味と粘性が強い。東壁付近では逆台形状に壁が立ち上がり、底面のレベルは基盤の凝灰岩面より低くなる。南壁付近になると底面は浅くなり、堆積土は東から流れ込んだ様相を示している。全体的には壁の立ち上がりは断続的で一様でなく、また、プランとしてのまとまりもないため遺構とは考え難い。

Ⅴ　考　　察

１．横穴の構造と編年

今回の調査で発見された横穴古墳のうち、横穴全体の構造がわかるものは１号～６号横穴で、その他の横穴は、丘陵南崖面に開口しているものを含め玄室まで削平を受けているため、本横穴古墳群の総括的な構造、形態について分析することはできない。

ここでは、６基の横穴古墳を中心に構造上の特徴についてまとめることにし、併せて横穴の編年を試みることにする。

６基の横穴古墳は、基本的には玄室＋玄門＋羨道から構成されるが、玄室の形態から次のように分類される。

１．玄室平面形

Ａ　類　方形を呈するもの …… １号・２号・６号

Ｂ　類　長方形を呈するもの …… ３号・５号

Ｃ　類　フラスコ形を呈するもの …… ４号

Ａ類はさらに２つに細分される。

Ａ・ａ類　幅が前幅＝奥幅となるもの …… ２号・６号

A・b類　幅が前幅<奥幅となるもの …… 1号

2．玄室立面形

イ　類　ドーム形を呈するもの …… 1号・2号・6号（？）

ロ　類　アーチ形を呈するもの …… 3号・4号・5号（？）

これを各横穴にあてはめると、次のようなタイプに分類される。

Ⅰ　類：A(a)・イ …… 2号・6号

Ⅱ　類：A(b)・イ …… 1号

Ⅲ　類：B　・ロ …… 3号・5号

Ⅳ　類：C　・ロ …… 4号

さらに、各類型の特徴を述べると、Ⅰ類は群中で大形の規模を有するもので、玄室四壁ラインは直線的に造営されており、いわゆる整正形の様相を呈している。2号横穴玄室壁面の四隅には、柱を表現したとみられる稜線が線刻されており、それらは天井中央部で交差し溝状の窪みを形成している。6号横穴の玄室左奥壁隅にも同様の稜線が認められることから、おそらく、2号横穴と同様の構造を呈していたものと推察される。

Ⅱ類とした1号横穴は、Ⅰ類と同様玄室平面形は方形を呈するが、奥壁ラインや四隅が丸味を有し、立面形は変形ドーム形を呈するものである。

Ⅲ類とした3号横穴と5号横穴は、規模の点で相違があるが、平面形が長方形プランを呈し、奥壁ラインと側壁ラインにも丸味をもつ点で同類に属するものである。5号横穴については、さらに、玄門両袖の玄室前端幅が左右非対象であり、形態的に崩れた様相が認められる。玄門と羨道の境に段差をもつ点でも、他の横穴との違いを指摘できる。

Ⅳ類は、横穴古墳の基本形態である玄室、玄門、羨道の区別が明瞭でなく、フラスコ状の平面形を呈する点で前述の類型とは区別されるものである。玄室の高さについても、残存する奥壁近くで76cmと極めて低く、退化した横穴古墳の形態を呈している。

以上のような特徴をもつ横穴古墳の形態上から、横穴群の変遷について考察を加えることにする。

6基の横穴古墳は、位置関係や構造上から同一時期に造営されたとは考えられないことから、玄室平面形を中心として各類の編年を考えることにしたい。

Ⅰ～Ⅳ類に分類された各横穴について、玄室平面形と立面形の組み合せから次の2つの変遷が考えられる。

(1)　玄室平面形が方形→長方形へ、立面形がドーム形→アーチ形へと変遷した場合

Ⅰ・Ⅱ類 ──→ Ⅲ類
　　└──→ Ⅳ類

(2) 玄室平面形が長方形→方形へ、立面形がアーチ形→ドーム形へと変遷した場合

Ⅲ類 ──→ Ⅰ・Ⅱ類
　　└──→ Ⅳ類

ところが、Ⅳ類とした4号横穴は、形態上から明らかに横穴古墳の退化形態を呈しており、(2)の玄室立面形の変遷において矛盾する。従って、(1)の変遷形式が妥当と考えられる。

ここで、各横穴古墳の構造及び配置関係についてさらに検討を加えると、6号横穴は群中で最大の規模をもち、平面形は整然としたいわゆる整正形の古い形態を具備しており、玄室に周溝を巡らす点などから特質の横穴古墳として把えられる。配置についても、6基のうちで最下位にあり、おそらく古い段階に造営されたものと考えられる。それに比べて4号横穴は、平面形フラスコ状の形態をもち群中で最も小形のもので、高位置にある点などから本横穴群中で新しい段階に造営されたものと考えられる。

2号横穴は、整然とした整正形の形態を有する点で6号横穴と同類に属するものであるが、左右対象形の平面形は群中で他に類を見ない。また、玄門奥行が94cmを測る比較的長い玄門構造は、6号横穴の構造と異なる形状を有している。2号横穴の左隣りに位置する1号横穴は、玄室平面形が方形を呈するが立面形が変形ドーム形の低い天井をもつもので、2号横穴より先行するとは考えられない。また、3号横穴は1号横穴に酷似しているが、玄室平面形が長方形で立面形がアーチ形を呈する点で明らかな相違点をもっており、1号横穴より後出のものと考えられる。5号横穴は、玄室平面形から3号横穴と同類のものと把えられるが、玄門部構造の点で1号～3号横穴と相違する。

以上のことから、本群の横穴古墳の編年序列を表わすと次のようになる。

6・2号横穴 ──→ 1号横穴 ──→ 3・5号横穴
　　└──→ 4号横穴

しかしながら、1号・2号・3号・5号横穴は丘陵の中位置にあり、それぞれの距離がほぼ等間隔に配置されていることから、おそらく造営時期にさほど時間的な隔たりはないものと推察される。

2．横穴群の年代と性格

(1) 金銅装大刀について

今回の調査で発見された金銅装大刀は、群中で最大の規模をもつ6号横穴玄室床面直上の第3層より出土したものである。

本刀の概要についてまとめると次のとおりである。

① 把部には、切羽と把頭の縁金具、把縁金具が認められ、これらは金銅製である。

② 把間金具と認められる金銅板表面には、蕨手状文の打ち出し文様が施されている。

③ 鐔は六窓の倒卵形を呈し、金銅製である。

④ 鞘尻は丸尻を呈し、鞘木を筒状の金銅板で包んでいる。

⑤ 責間金具の金銅伏板には、円文打ち出し、列点文により装飾されており、伏板の上下両端部にスリット文様が付けられている。

以上のような装飾大刀の特徴は、概して頭椎大刀にみられるものであり、把頭を欠損しているが、本刀は頭椎大刀と考えられる。

県内における頭椎大刀の出土例は、僅かに2例が上げられるにすぎない。それは、名取市山囲古墳と岩沼市二木横穴古墳群である。

山囲古墳出土の頭椎大刀は、全長95.5cmの完形品で把頭の長径8.2cm、切羽5.5cm、把間12.2cm、鐔は長径8.5cmを測る。把頭は、金銅板で被われた竪畦目式のもので中央に懸通穴を有している。把間金具には、打ち込み点線による波状文様が施され、鐔は六窓の倒卵形で金銅製である。鞘は丸尻で、外装は木製の鞘を鞘尻まで通して金銅板で包んでおり、足金具と責金具が装着されている。足間と責間には文様が施され、佩表には直径1.1cmの円文打ち出しを2列に施し、佩裏にも点列打ち出しがある。[1] この山囲古墳刀は、本刀と類似している。

二木横穴古墳群出土の例は、3号横穴玄室内から出土したものである。把部の破片と責金具が付着した刀身部がみつかっており、金銅把頭の推定長径が11cm前後の大形の竪畦目式を呈するものである。[2]

さらに、福島県における頭椎大刀の出土例をみると、管見によれば9例を上げることができる。そのうち8例は、穴沢咏光・馬目順一両氏によって紹介されているが、[3] 他の1例については、矢吹町鬼穴1号墳が上げられる。[4] それは、同古墳から把頭の縁金具と鞘尻が出土していることから、おそらく頭椎大刀が副葬されていたことは、間違いないものと思われる。

東北地方における頭椎大刀の出土例は、現在までのところでは、宮城県、福島県の両県に限られている。本横穴群出土の大刀は、分布の最北端に位置するものである。

東北地方出土の頭椎大刀は、概して横穴式石室を内部主体とする円墳に副葬される例が多く、横穴古墳出土例は、本例を含めて3例である。出土例ごとの概要説明は、紙面の関係上省略するが、表にまとめたので参照されたい。頭椎大刀把頭は、竪畦目式のものと無畦目式の2種類があり、把間は銀線葛纏を有するものが1例（淵の上刀）、蕨手状文などの打ち出し文様を有するものが3例（山囲刀、下総塚乙刀、大代刀）、鐔は、六窓及び八窓の倒卵形を呈するものが大部分で、足間及び責間に円文打ち出しの文様をもち、鞘尻が丸尻を呈するもの（山囲刀、下総塚乙刀、大代刀）と鞘尻が平尻を呈するもの（蝦夷穴刀、下総塚甲刀）がある。これらは、

全て金銅装大刀であるが、清戸迫横穴古墳出土の例だけが鉄製頭椎大刀であり、本例中では特異なものと言える。

以上のように、前述の特徴をもつ本横穴群出土の頭椎大刀に類似する例としては、名取市の山囲刀、白河市の下総塚乙刀が上げられるほか、古くから知られている茨木県笄崎出土刀などがあり、本刀は、頭椎大刀の典型的装具を有するものと考えられる。

東北地方の古墳出土頭椎大刀一覧表

	古墳名	型式、内部主体	把頭	切羽	切羽縁	把間	鐔	足間	責間	鞘尻
宮城	山囲古墳	円墳・横穴式石室	金銅・竪畦目	金銅	金銅	波状文様	倒卵6窓	円文打ち出し	円文打ち出し	丸尻
	二木3号横穴	横穴	金銅・竪畦目	—	—	—	—	—	—	—
	大代6号横穴	横穴	—	金銅	金銅	蕨手状文	倒卵6窓	—	円文打ち出し	丸尻
福島	源氏山古墳	円墳？	—	金銅	—	—	喰出鐔	足金具	責金具	—
	上条2号古墳	円墳・横穴式石室	—	—	—	—	金銅6窓	—	—	丸尻
	淵ノ上古墳	円墳・横穴式石室	金銅・無畦	金銅	金銅畦	銀線葛纏	金銅6窓	—	金銅	—
	蝦夷穴古墳	円墳・横穴式石室	金銅・竪畦目	金銅	—	—	金銅8窓	足金具	責金具	平尻
	跡見塚古墳	円墳	金銅・竪畦目	—	—	—	—	—	—	—
	鬼穴1号墳	円墳・横穴式石室	—	—	金銅	—	—	—	—	—
	下総塚古墳(甲)	前方後円墳・横穴式石室	金銅・無畦	金銅	—	—	倒卵6窓	—	—	平尻2釘
	下総塚古墳(乙)	前方後円墳・横穴式石室	金銅・無畦	金銅	金銅	蕨手状文	倒卵6窓	円文	円文打ち出し	丸尻
	清戸迫横穴	横穴	鉄・無畦	—	—	鉄板・鉄線纏	鉄8窓	—	—	—

(2) 横穴群の年代と性格

大代横穴古墳群の造営年代と被葬者の性格について考察を行なうことにするが、今回の調査の結果、各横穴古墳からの出土遺物は極めて少なく、本論を行なうにはいささか資料不足の感がある。しかし、県内の横穴古墳にはほとんど副葬されることがない頭椎大刀の発見は、本横穴群の年代と性格を考える上で重要な要素を有している。

まず、横穴群の年代について考えることにするが、横穴古墳の内部から出土した遺物の中で年代考察の資料となるのは、頭椎大刀と鉄刀だけである。これらは、ともに6号横穴から出土している。

頭椎大刀は、横穴式石室を内部主体とする円墳及び前方後円墳に副葬される例が多く、横穴古墳からも出土していることは前にも述べたが、二木横穴群出土のものは把頭だけであり調査報

告書が未刊であるため詳細は不明である。また、清戸迫横穴群出土の大刀は、鉄製大刀であり本刀の参考資料としては乏しいものがある。しかし、装飾大刀の研究が最近盛んに行なわれており、古墳の年代を把える貴重な資料の１つとして注目されて来ている。頭椎大刀の研究としては、全国的規模で出土例を集成した後藤守一氏の研究がある。[5] この論文の中で、頭椎大刀は古墳時代に行なわれた刀剣装飾の中で環頭・円頭・圭頭大刀等の拵の後に発達したものとしており、頭椎大刀出土の古墳は、全てが古墳時代後期に比定されるもので、下限については奈良時代までは下降するものはないとして、年代は古墳時代後期、特に末期に近いものと考えられた。また、把頭の形式から無畦目式のものが古く、畦目式を新しい時期に位置づけている。

信濃地方の頭椎大刀を中心として、全国58例の出土古墳の集成をした桐原健氏は、この論文の中で、頭椎大刀は７世紀代の古墳から出土していることを指摘している。[6] さらに、福島県下の出土例を中心にして頭椎大刀試論を発表した穴沢咏光・馬目順一の両氏は、頭椎大刀の絶対年代は追葬を行なう古墳や横穴古墳からの推定は困難であるとしながらも、千葉県金鈴塚古墳から出土した環頭大刀や方頭大刀、圭頭大刀、鶏冠頭大刀との共伴例から、横畦目式の流行期を７世紀前半に位置づけ、頭椎大刀の年代を６世紀末～７世紀中葉と把えている。[7]

これらの論文、研究報告を参考にして考えると、大代横穴群出土の頭椎大刀は、蕨手状文・円文の打ち出し文様で装飾された典型的な装具を備えたものであり、頭椎大刀編年上で新しい時期の所産として把えられることから、本刀は７世紀前半頃に位置づけられる。

また、６号横穴より出土した鉄刀の中で全体の原形が復元できたものが１振ある（第13図４）。この鉄刀は、全長31cmの小形のもので、関部に鎺が残存している平造り鉄刀である。この鉄刀の特徴は、茎の幅が尻部でややすぼまる細尻形を呈し、関の切れ込みは刃側、背側ともに浅く切れ込んだ両関タイプに属するものである。このタイプの鉄刀は、７世紀以降に出現すると考えられている。[8]

以上のことから、頭椎大刀を出土した６号横穴の年代は、７世紀前半頃に位置づけられ、今回の調査で発見した横穴群の年代については、横穴古墳の構造及び変遷からおおよそ７世紀前半～８世紀にかけて造営されたものと把えられる。

次に、本横穴古墳群の被葬者の性格について述べることにする。はじめに、頭椎大刀の出土分布についてみてみると、南は九州福岡県から北は宮城県までほぼ全国的な分布を示すが、およそ100ケ所の出土地の約80％が東日本にあり、特に関東地方に集中している。出土する古墳の多くは、円墳が主体を占め、横穴古墳がそれにつづく。千葉県や群馬県など関東地方の一部では前方後円墳からも出土している。東北地方では、出土分布が福島・宮城に限られており、これは横穴古墳の分布と一致している。

このような特徴をもつ頭椎大刀を所持する本横穴群の被葬者は、どのような性格を有するのか。佩用者の性格について、桐原健氏の興味深い論考がある。[9]桐原氏は、頭椎大刀出土の古墳は7世紀代の所産のもので、新興の氏族に佩用された可能性を指適し、7世紀に至って東国に勢力を伸長してきた物部氏との関係が強いとしている。このことについては、後藤守一氏も注目されていたようである。[10]

いずれにしろ、頭椎大刀の佩用者は中央政権と結びついた氏族と関連を有するものであり、本横穴群の被葬者についても、6号横穴を首長とする新興の氏族の存在を想起させるものである。

Ⅵ　ま　と　め

本市唯一の横穴古墳群である「大代横穴古墳群」の本格的な調査は、今回の調査が初めてである。調査は、都市計画街路工事のため削平を受ける丘陵部分を中心に実施し、併せて南側崖面に開口している横穴古墳の実測調査も予定していたが、時間的な都合上全ての横穴古墳を計測することは出来なかった。それでも、横穴群の位置関係を確認し、数基の横穴古墳の清掃・実測が出来たことは、本横穴群の基本的資料の蓄積と今後の対応を図る上で、大変意義があったものと思われる。

最後に、今回の調査結果についてまとめておきたい。

1．本横穴群は、丘陵南斜面を削平して東西に走る県道多賀城―菖蒲田線に面した崖面に存在していることが知られていたが、新たに、丘陵西斜面にも造営されていることが明らかになり、さらに、東側の丘陵先端部にも存在が確認されたことから、比較的広い範囲にわたって造営された横穴古墳群であることが判明した。

2．今回の調査で発見した遺構は、横穴古墳8基、塚1基である。横穴古墳の構造上から4タイプに分類したが、新旧の形態が混在しており、年代的には7世紀～8世紀代にわたって造営されたものと考えられる。塚の年代、性格は不明である。

3．6号横穴から発見された頭椎大刀は、出土分布の最北限に位置するものであり、本県では3例目の出土である。

4．本横穴群の被葬者の性格については、古墳時代の刀剣装飾の1つとされる頭椎大刀の出土から、中央政権と直接つながりをもつか、あるいはそのような氏族と結びつきをもつ一族が存在していたと思われ、海岸部一帯を掌握する勢力を保持していた首長の存在が想像される。

5．被葬者一族が日常生活を営んでいた集落跡などの遺跡については、現在のところ全く不明

であり、今後の問題として提起される。

末筆ではあるが、今回の調査及び本報告書の作成に当り、いろいろとご協力・ご指導を下さった方々に対し感謝の意を表する次第である。

(註)

(1) 小野　力「宮城県名取市山囲古墳調査報告」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会　1968年

(2) 註(1)に同じ

(3) 穴沢咊光・馬目順一「頭椎大刀試論―福島県下出土例を中心にして―」『福島考古』第18号　福島県考古学会　1977年

(4) 福島県矢吹町教育委員会「谷中古墳」矢吹町文化財調査報告書　1971年

(5) 後藤守一「頭椎大刀について」『考古学雑誌』第26―8，12　1936年

(6) 桐原　健「頭椎大刀佩用者の性格―信濃出土の頭椎大刀を中心にして―」『古代学研究』第56号　1969年

(7) 註(3)に同じ

(8) 臼杵　勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古代研究会　1984年

(9) 註(6)に同じ

(10) 註(5)に同じ

(参考文献)

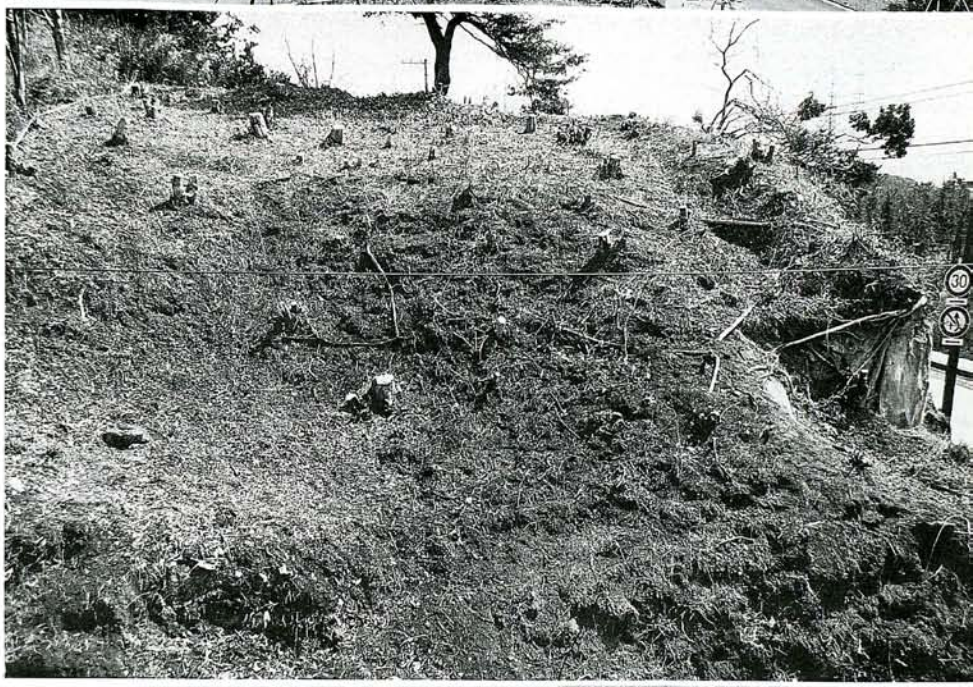
1．経済企画庁総合開発局「土地分類図（宮城県)」　1972年

2．宮城県教育委員会「埋蔵文化財発掘調査報告書（桝形横穴古墳群)」宮城県文化財調査報告書第12集　1967年

3．宮城県教育委員会「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）」宮城県文化財調査報告書第40集　1975年

4．宮城県教育委員会「砂山横穴古墳群調査報告書」宮城県文化財調査報告書第44集　1976年

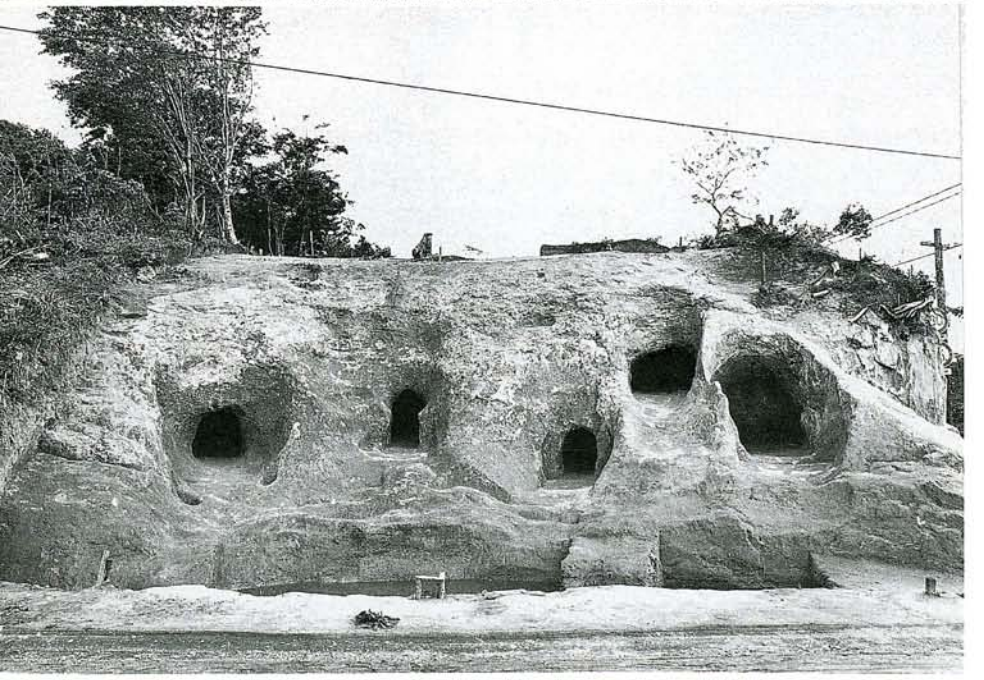
図版 1
遺跡遠景（南側より）



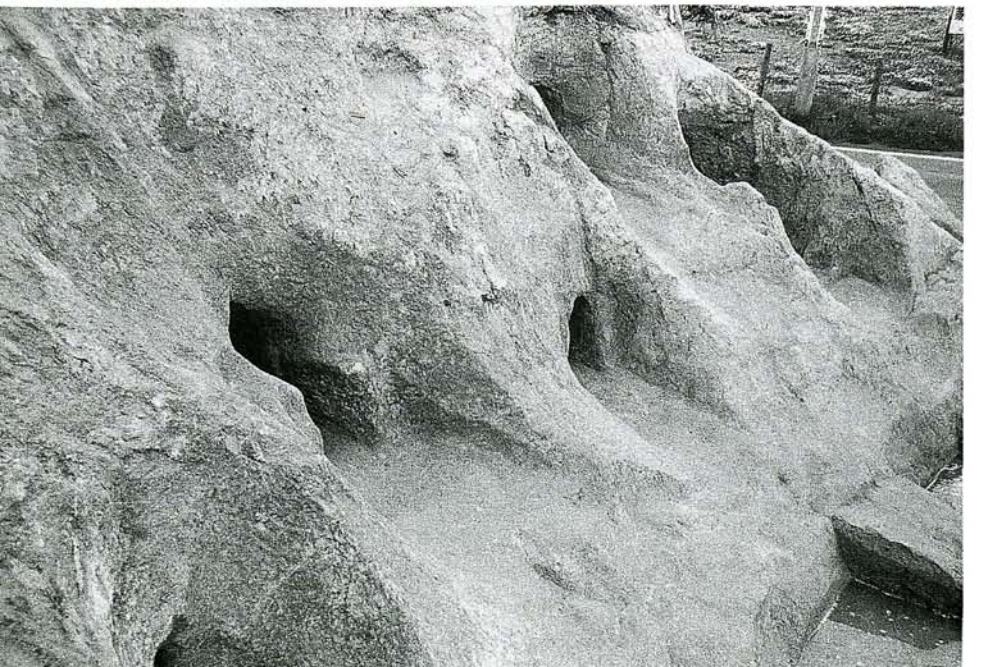
図版 2
丘陵西斜面伐採状況
（西側より）

図版 3
表 土 除 去

図版 4
2 ～ 5 号横穴検出状況
（西側より）



図版 5
1 ～ 6 号横穴完掘状況

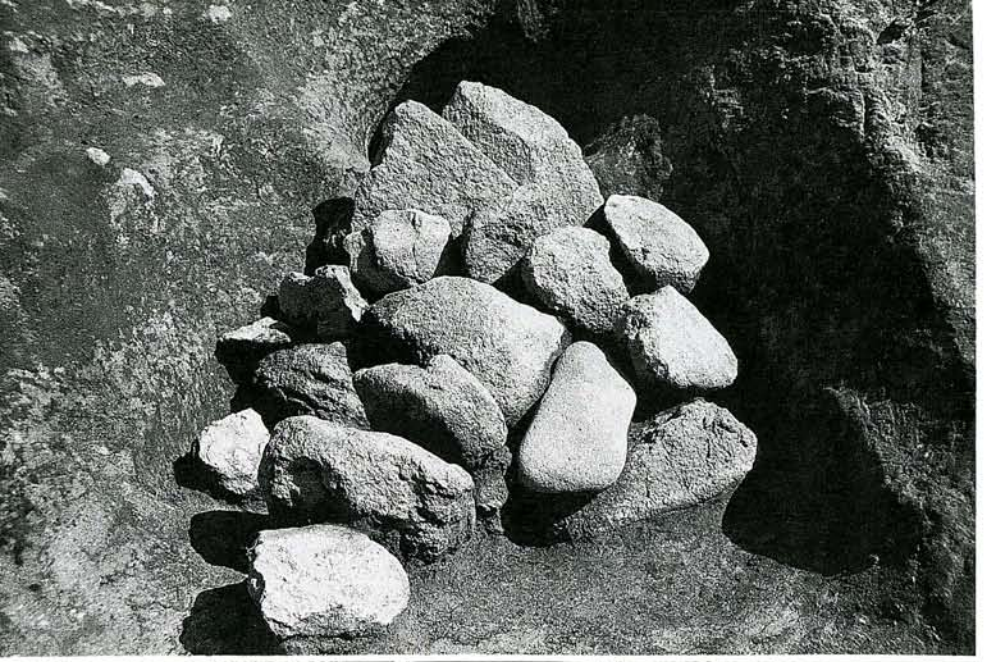


図版 6
丘陵西斜面横穴完掘状況　（北側より）

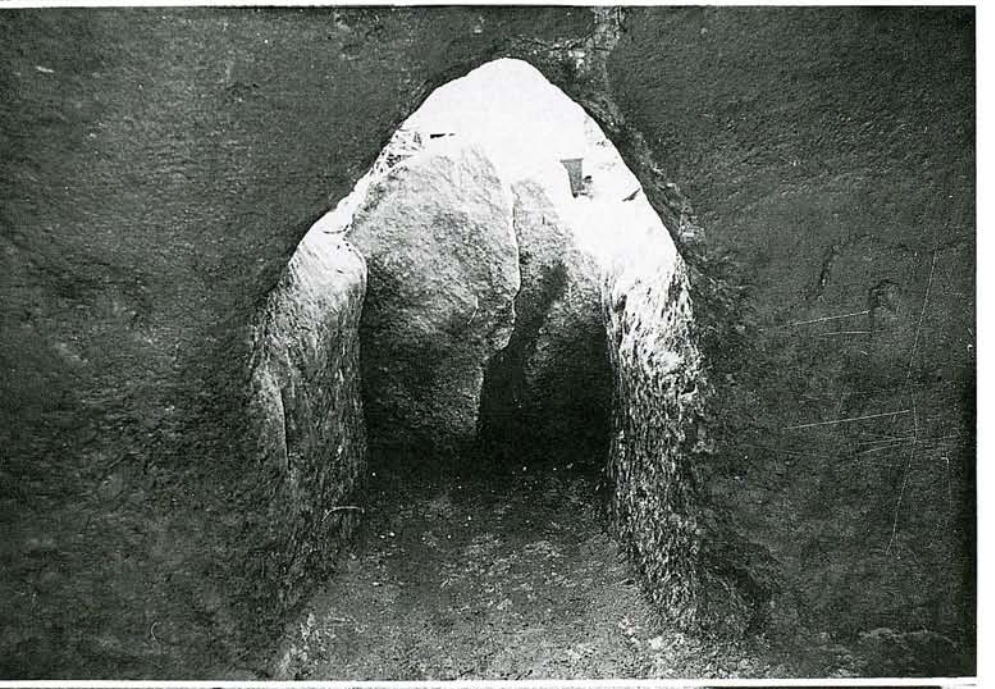
図版 7
1 号横穴閉塞状況

図版 8
1 号横穴玄門
（玄室側より）

図版 9
1 号横穴玄室奥壁

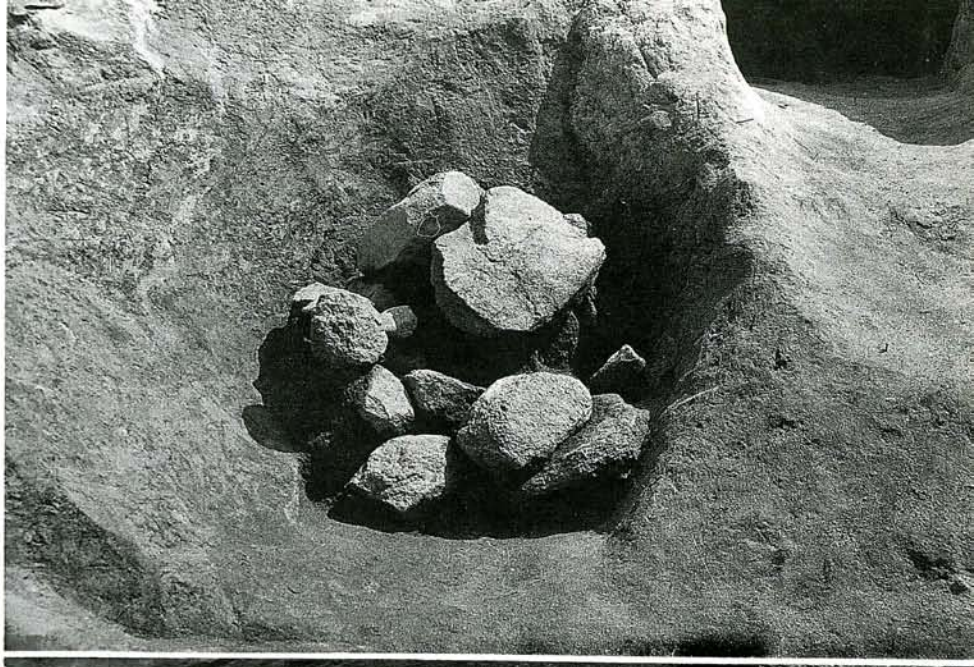


図版10
2号横穴閉塞状況



図版11
2号横穴玄門
（玄室側より）

図版12
2号横穴玄室天井刻線



図版13
3号横穴閉塞状況

図版14
3号横穴玄門
（玄室側より）

図版15
3号横穴玄室工具痕

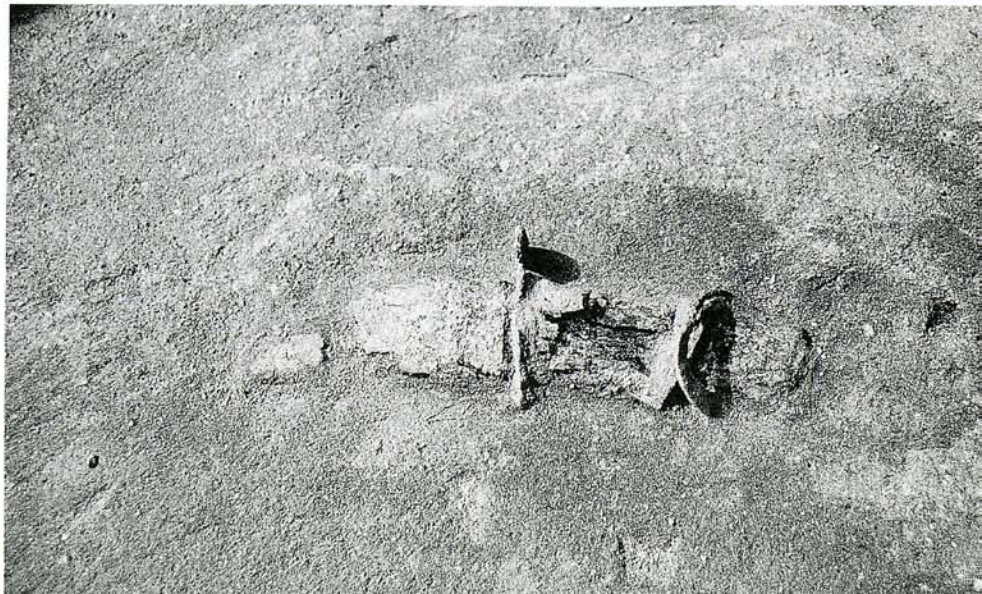
図版16
4号横穴土層堆積状況

図版17
5号横穴閉塞石

図版18
5号横穴玄室耳環出土状況

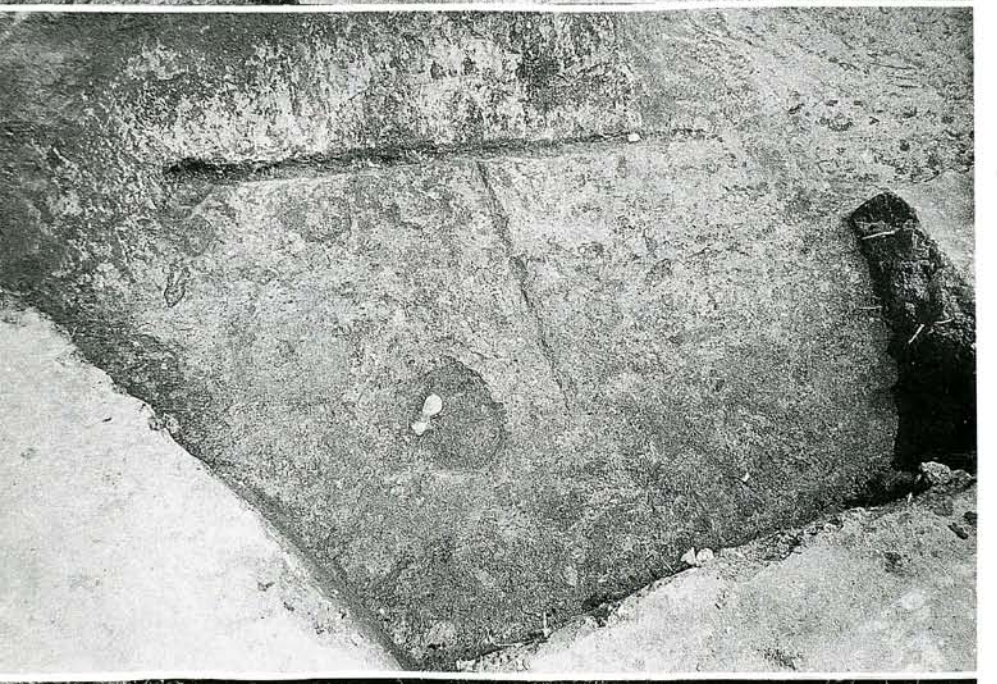
図版19
6号横穴（西側より）

図版20
6号横穴完掘状況
（東側より）

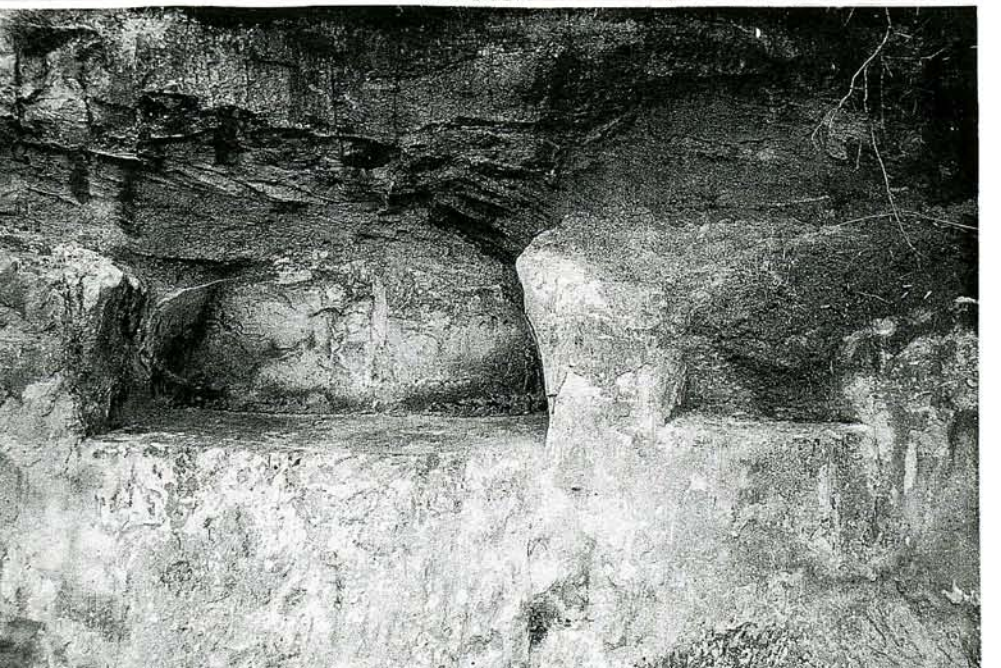


図版21
6号横穴玄室金銅装大刀（把部分）出土状況

図版22
7号横穴（南側より）

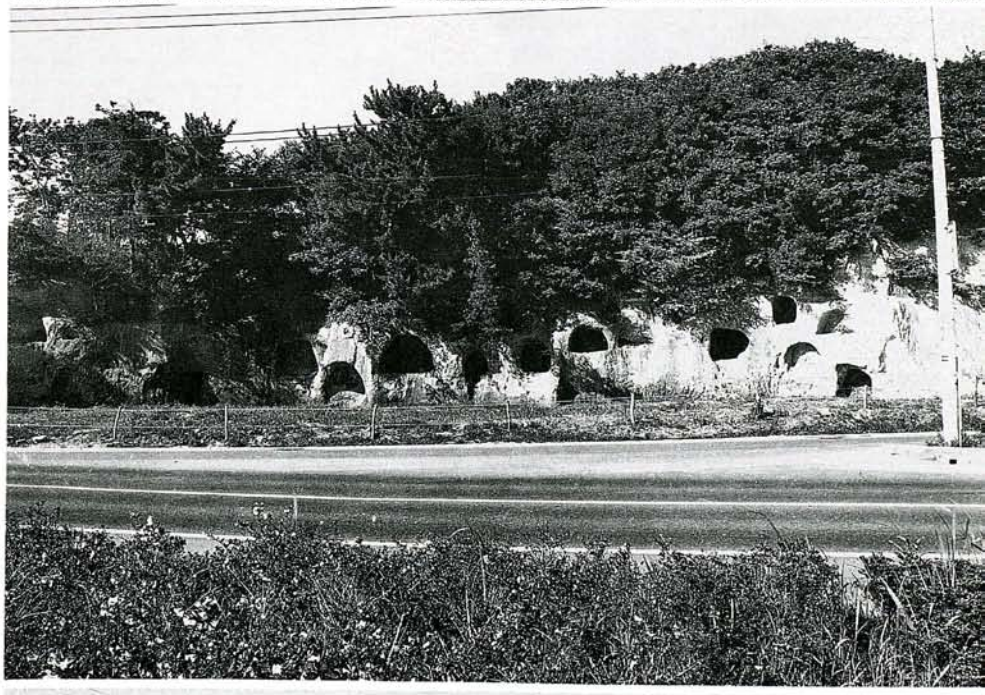


図版23
8号横穴（南側より）



図版24
13・14号横穴
（南側より）

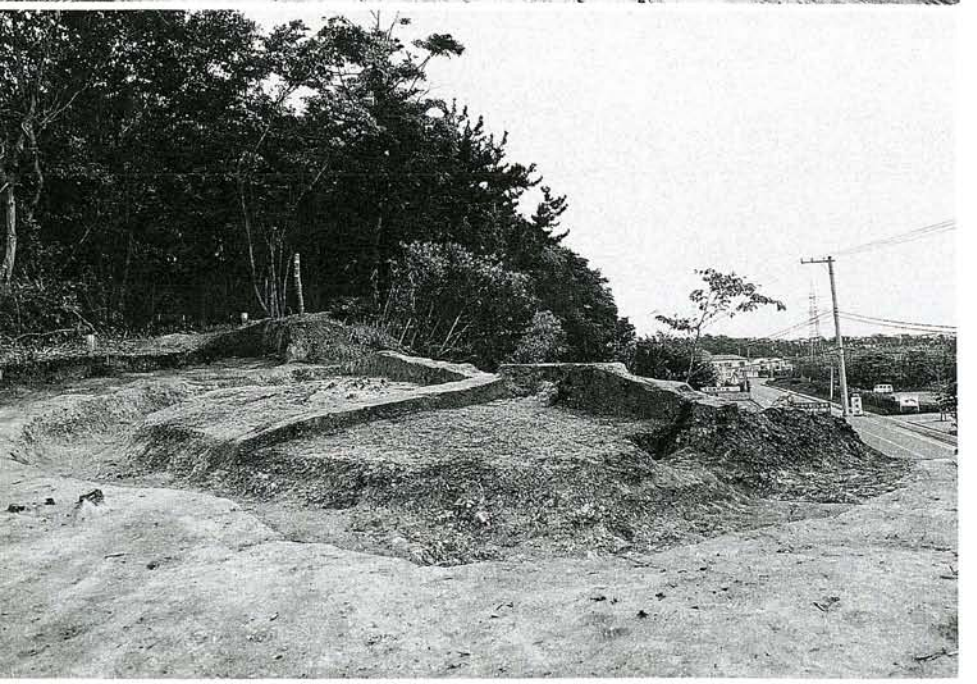
図版25
21・22号横穴
（南側より）



図版26
丘陵南崖面の横穴群
（南側より）

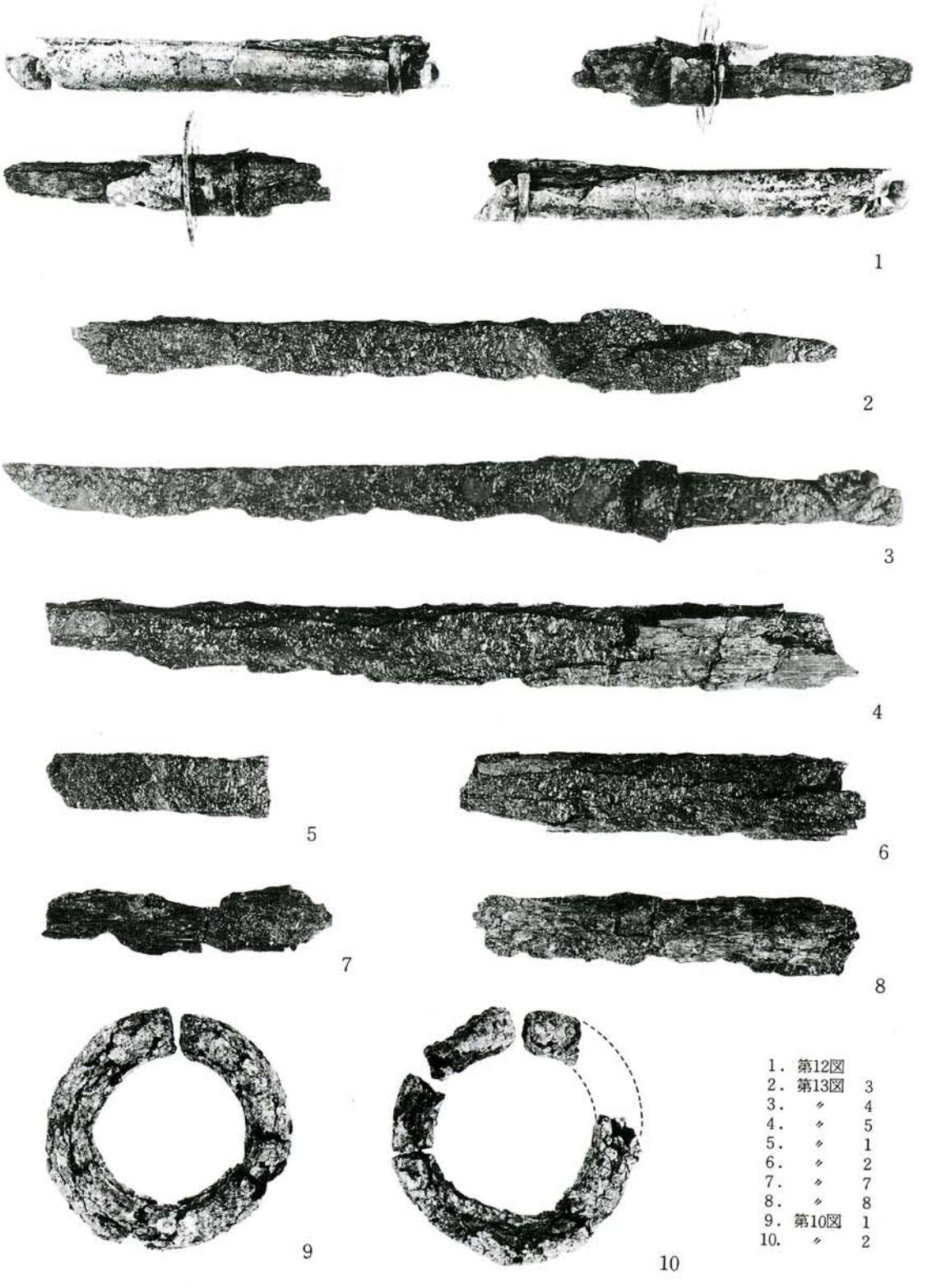
図版27
同上（南西側より）

図版28
塚検出状況
（北西側より）



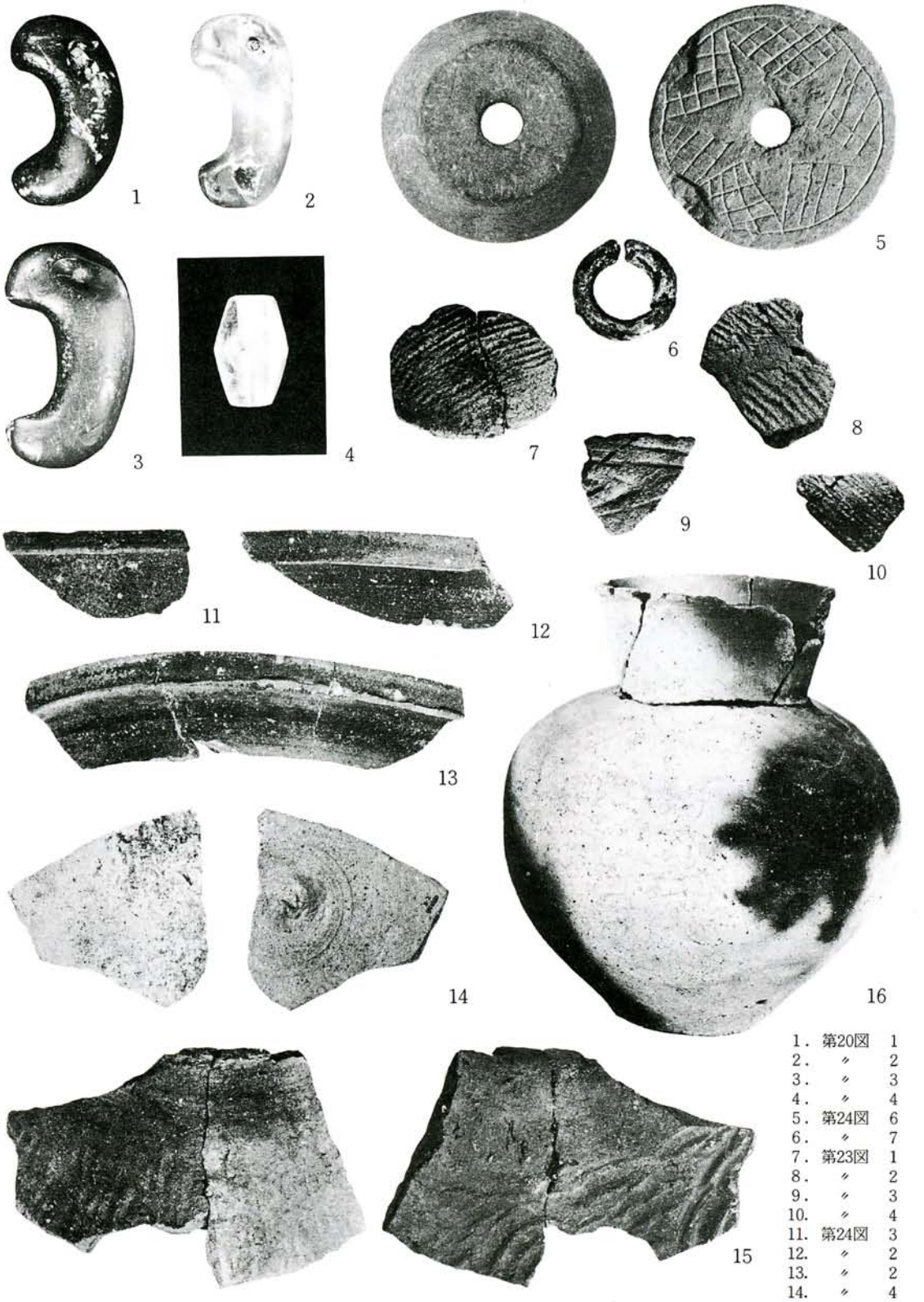
図版29
塚積土断ち割り状況

図版30
調 査 風 景



1．第12図
2．第13図　3
3．〃　4
4．〃　5
5．〃　1
6．〃　2
7．〃　7
8．〃　8
9．第10図　1
10．〃　2

図版31　出土遺物



1.	第20図	1
2.	〃	2
3.	〃	3
4.	〃	4
5.	第24図	6
6.	〃	7
7.	第23図	1
8.	〃	2
9.	〃	3
10.	〃	4
11.	第24図	3
12.	〃	2
13.	〃	2
14.	〃	4
15.	〃	5
16.	〃	1

図版32　出 土 遺 物

多賀城市文化財調査報告書第７集

大代横穴古墳群

－発掘調査報告書－

昭和60年３月31日発行

編　集　多賀城市教育委員会
発　行　多賀城市中央二丁目１番１号
　　TEL（02236）８－１１４１
印　刷　㈲伊藤印刷所
　　多賀城市下馬五丁目１番７号
　　TEL（02236）２－０８０５